
とらぶる すぴりっつ

城弾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とらふる すぴりつ

【Zコード】

Z6418Z

【作者名】

城弾

【あらすじ】

先祖がかけられた呪いのおかげで酒を飲むと身も心も女性化する体質の酒井真澄。

しかも淫乱な傾向が。

そして酔いが覚め男の心に戻るとき、女として暴走した記憶が眞澄を赤面させる。

一杯目 吞まれたら女の子？

大昔、日本のとある村。

「こりつ。五兵衛。また酒を呑んだねつ」

若い娘がきつい口調で五兵衛と呼ばれた男を叱責する。

年は数えで26とまだ若い五兵衛だが、酒に酔つた赤ら顔と千鳥足が実年齢より老けた印象を与えていた。

「呑んださ。それがどうした？ オレの稼ぎでオレが呑む。それのどこが悪い」

確かに五兵衛は烟を耕し、合間に狩もしてきちんと稼いでいる。そして唯一の楽しみが酒だつた。ただ仕事が終わつたといえど、陽の高いうちから飲むことがあるのが玉に瑕だつた。

「アンタは普段真面目なのに酒癖が悪いから言つてるんだつ」

「お静の強い娘である。名はお静。

「げへへへ。そんなことよりオレの嫁にならねえか？」

下卑た笑いを浮かべると今までの被害者たちに代わつて詰め寄るお静の着物を捲し上げた。

その時代である。下着などつけていない。警戒していたのだが、あまりの早業に間に合わなかつた。

「~~~~~つつつ

声にならない悲鳴を上げるお静。「もうお嫁にいけない」と言つところであるうか？

それをよそにのん気に歩き去る五兵衛。

その夜。10人目の被害者であるお静も加わり対策会議を練つていた。

「もうガマンできない。役人に突き出してお裁きをしてもらいましょ」

全員が全員「セクハラ」の被害者だ。だが

「そこまでは…」

「五兵衛も酒さえ呑まなきゃ氣のいい男なんだし」

「働き者だし」

実際に素面の五兵衛はむしろ村に多大な貢献をしていた。酒癖だけが問題なのだ。

真面目な反動か酔いつとてつもなく酒癖が悪い。

「用は酒を止めさせりや いいけど」

「ちゃんと金を払っているんだから売るのは止められないし

「あれだけが楽しみだから自分から止めるとは思えないし」

堂々巡りになった。

「よし。仕方ない。あれをやるか

相談を受けていた年長者の女・お鶴がつぶやく。懐に入っていた紙を取り出すと、その中にしまっていた一本の髪の毛を藁人形に。

「お鶴さん。まさかお百度參り…」

「殺さぬさ。しかし我らの受けた苦痛は身を持つて味わってほしいしな。お主らも力を貸せ。怨念の力が要る」

そう言われても殺す覚悟はない。埒が明かないでお鶴は説明をすることにした。

「殺す代りにな…」

それを聞いた娘たちの表情が変わる。
そして嬉々として呪術に参加した。

翌日。五兵衛は早々に畠仕事を切り上げると、畠で一杯やり始めた。

「ふは～っ。五臓六腑に染み渡る」

美味そうに飲み干す。そして酔いが回る。その途端にだ。

ボン！ そんな音を立てて五兵衛は畠に包まれた。そしてそれが晴れると着物姿の娘が。

「な…なんだ？ もう酔っ払ったのか？ オレが女に…夢か？」
非現実的な出来事だ。夢か酔いのせいにするのももつともだ。

だから楽しみである酒を中断しない。

しかし酔いが回れば回るほど自分の心が女に染まつていいくのがわかる。

「これはいったいなんとしたことでしょ?」

なんと酔うにつれて着物まで艶やかに変わる。髪はいわゆる日本髪に。ご丁寧にかんざしまである。

「うまく行ったようじゃの」

隠れて様子を見ていたお鶴たちが現れた。

「お鶴?」「これは夢か?」

「夢などではない。呪いじゃ」

「呪い?」

酔いのせいか。それとも非現実的な出来事に思考が追いつけないのか、ただ鸚鵡返しする五兵衛だつた娘。

「そうじや。戒めのための呪いじゃ。五兵衛。お主は今後酒を呑むと女子になるぞ」

「そ……そんな」

「酒癖は理屈では治りやん。だから酒を呑むと女子になる呪いをかけた。女子になりたくないば酒を止めることがじやな。殺さぬだけありがたいと思え。そしてこの呪いは末代まで続くぞ。それだけ我らの恨みは大きいと思え」

高笑いをする女たち。五兵衛だつた娘はぺたりと座り込む。

四半刻（30分）もそうしていたか。

「もし。娘さん。どうなさつた?」

通りすがりの侍が心配して五兵衛だつた娘に声をかける。端整ないい男だった。そしてある「ことか五兵衛は頬を赤らめた。そう、心が女になつていてる。

「お侍様：はい。少々気分が悪くなりました」
消え入りそうな声で訴える。

「それはいかんな」

侍は五兵衛を送る。

そして五兵衛は「送られた礼」と一泊を勧める。ついで五兵衛のほうから男と女の関係に。

侍は神妙な面持ちで再び旅に出た。そして五兵衛も酔いがさめてきたら猛烈に後悔した。未だに娘姿だが、心だけは男に戻った。
「お…オレは男なのに男に…恐ろしい。酒を呑むとそんな気持ちになるようにな…」

しばらくして「一日酔い」も治まつた。酒が抜けるにつれて男へと戻つて行く。一生を女で生きるかと恐怖した五兵衛は安堵した。同時に酒を飲んで女になりきつたことを恐怖した。
だから五兵衛は死ぬまで一度と酒を口にしなかつた。
そのため元々が真面目なのできちんと祝言を挙げて、夫婦仲良く暮らした。

「この話はこれで終わるはずだった。
そう。呪いが末代まで続いていなければ…」

一杯目「呑まれたら女の子?」

現代の日本。ある商社。朝のミーティング。課長のとなりに若い男。その前方に取り囲むように男女。
新しく来た社員を紹介しているところだった。
「このたび本郷支社にきました酒井真澄です。よろしくお願いします」

女性のような名前だが立派な男性である。
ただ優しい顔立ちは女顔といったし、背もそんには高くない。

「酒井君はまだ25歳と若いが優秀な人材だ。即戦力になるだろ?」「課長の説明。

「よし。今日は酒井の歓迎会だ。吉野君。どこか店を押させてくれサブリーダーにあたる中年男性が女性社員に依頼する。

「もうやつときましたよ。越野さん」

ロングヘアを束ねたO~L姿の吉野桜子が笑顔で返す。彼女も25歳なので酒井と同期の可能性が。

「さすが吉野さん。気配り上手」

吉野より一つ上の男性社員。菊水晃一がややおどけて言つ。

「当然です。吉野先輩はあたしたちのお手本ですもの」

24歳だが顔に幼さの残る宇良かすみが先輩を持ち上げる。

「そうよね。それにお酒も強いし」

仕事ができるのと酒の強さが関係ないと思つが、かすみと同期の澤野いづみには同列扱いらしい。

「ま。お前とは違うってわけだ」

「ひどいっすよ。竹葉さん」

31歳の竹葉忠正に菊水が抗議すると笑いが巻き起こつた。しかしひとりだけ浮かない表情をしていたのは主役である酒井。

「あら? お酒は嫌い?」

いきなりフランクに話しかける吉野桜子。

「いえ…ただ生まれてこの方飲んだことがないんですよ」

こちらはさすがに硬さがある酒井。

「へえ。25にもなるのに珍しい」

「本当だな。一度試して体に合わなくてやめたと話つひとへ..」

「宗教上の理由とか?」

「いや。親の命令で」

これまた25歳の男子とも思えない発言である。

彼の弁によれば父親の言葉に異様な迫力を感じて、命令をする気になつたとのこと。

それにその父親自身が酒での失敗談を教訓として聞かせたこと。

町中の酔っ払いの醜態を彼自身が嫌っていたことが、酒を口にしない理由だった。

「じゃ試してみましょ。新しい自分を発見できるかもよ」

「はあ…」

自分を歓迎しての宴だけに無下に断れない。人付き合いはぞんざいには出来ない。でも本音は出たくなくて浮かない表情だった。

浮かない顔は酒井だけではない。後輩の女子社員たちもだ。

「吉野先輩。あれさえなれば本当に尊敬できるんだけどなあ

「ザルだもんね」

吉野桜子は有能な社員である。そして性格も穏やかで、かつ美女でスタイルもいい。

しかし、とんでもない大酒飲みである。

休日で朝食を採ろうと冷蔵庫を開けたがワインしかなかったため、それで空腹を紛らわせてたと言う逸話もあるつわものだ。

「まあまあ。下戸なら下戸で楽しみ方はある。さあ。仕事に入るぞ。ああ。吉野君。とりあえず彼に本郷支社のことを色々教えてあげてくれ

「わかりました。課長」

仕事も終わり居酒屋に。月曜だったのですぐに宴会も入つてなく、8人が楽に入れた。

週の初めだけに掘りごたつの座敷には周りに客がいない。貸しきり状態だ。

「それじゃ酒井君の参加を祝つて、かんぱーい」

8人のうち6人がビールのグラス。女子社員もだ。

主役である酒井は烏龍茶。吉野はいきなりコップ酒だ。

宴は進む。よくある話だが本目的がどこかに行ってしまい、もはやただの飲み会である。

課長と越野は仕事の話。竹葉と菊水はギャンブルの話。かすみと

いざみは他愛もない話だった。

そして桜子の甲高い声が響く。片手には空いた竹筒。

「竹酒もういっぽーん」

上機嫌ではあるが頬が染まつたりはしていない。顔色だけ見ていると酔っ払っているとは思えない。

ぽかーんとして見ていた酒井である。

「なによ。そんなに見てて」

「いや…女なのに凄い呑むなと思つて」

「あなたはぜんぜんなのね。男なのに」

となりが呑まないと言つるのは結構白ける。ちょっとカラミに入る。

それに対してまともに返事をする酒井。

「ああ。おじいちゃんが言つていた。『酒井家の男子は酒を呑んではいけない』と」

「なに? それ?」

「呪いなんだそうだ」

酒は呑んでないが、酒の席の雰囲気で「酔つた」のか、口調が砕けこんなことまで喋つていた。

「呪い?」

「ここで笑われればそれでおしまいだった。しかし桜子が眞面目に問い合わせたので、酒井もつい伝承を語つてしまつた。

「酒癖の悪さで呪われて、酔うと女になる呪い…………？」
相変わらず仲間しかいない状況。だから桜子の素つ頓狂な声は全員に聞こえた。

「だから、あくまで言い伝えだから。そんなに吹聴しないで」
素面の酒井は慌てて止めるが遅かった。

「ふーん。面白そうじゃない。ね。だったら試してみない?」

舌なめずりでもしそうな表情の桜子。

「イヤだよ。迷信だとは思つけど。それにオレは酔っ払いが嫌いだし

この言葉がカチンと来た。見た目は素面に見える桜子だがしつかり酔っていた。

「ふ〜〜〜〜〜〜〜ん…………

根性なし」

「なつ！？」

知り合つたその日に言われるような台詞ではない。酒井もカチンと来た。

「だつてそうじょやない。わけもわからない言い伝えに怯えて、人生の楽しみの三分の一を捨ててるなんて根性なしでなかつたらんなのよ」

（吉野先輩の中でお酒の占める比率つてそんなに高かつたんだ…）さすがについていけない後輩女子。

「お…おい。吉野君。飲みたくない人間に無理やり…」

「…………わかったよ…………」

せっかく越野が止めたのに当の酒井が爆発に乗つてしまつた。

「呑んでやるうじやないか。根性なしかどうかよく見てみろ」言つなり彼は余つていた瓶ビールをラッパ呑み。残量としてはコップ一杯分だが、その行為そのものが危険兆候だつた。

「げほつ。げほつ」

生まれて初めての飲酒でラッパのみをやらかせばむせもする。しかもビールである。

「おー。いい飲みっぷり。それじゃこれもいつて見よー」

竹酒のためにぐい飲みは何故か一つ用意されていた。店員が余計な気を利かせたようだ。

その使われてないほうに注がれた酒をぐいっとある。

どうやら呞たのを治める水のつもりで飲んでしまつたらしい。

「なーんだ。呑めるじやない。良かつたわねー。これで人生の楽しみが増えたわよ」

バンと背中を叩く。当の酒井は赤い顔をしていた。

「…………ひっく」

べたにしゃつくりをしたかと思つと「爆発」した。

「な、何なの？」

正確に言おう。酒井の下のまつからボンと言つ音とともに煙が上がりつた。

「浦島太郎」の玉手箱を開けるところな感じだらうか。
そしてその煙がはれると見たこともない女がそこにいた。
紺色のレディースーツ。薄いピンクのブラウス。無難な配色のスカーフ。

肉体的には誰が見ても巨乳。そして腰にまで達する黒髪。
とろんとした目つきだが切れ長の涼しげな田元。長いまつげ。
口紅を塗ったばかりのような赤い唇。

白い肌だが頬がピンクに染まりなんとも色っぽい。

フェロモンを撒き散らしているような大人の女性だった。

「だ…誰よ。あんた？ 酒井君はどこ？」

「なーに言つてんですか。あたしですよ。あたし。あたしが酒井真澄です。桜子さん」

その〇〇風の美女は酔っ払いそのままの口調で宣告する。

「なんですか？」

元々酒に強い桜子だが、さらにこれでは酔いもさめる。

「それじゃあ…呪いの話は本当…」

目の当たりにしては信じないわけにはいかない。

「ほ…本当に酒井なのか？」

目前で変身したのを見た以上、信じるしかないのだがそれでも信じられず越野が尋ねる。

それに対して淫靡な笑みを浮かべる酒井。いや。この姿の時は下の名前で呼ぼう。

「越野さん。さつきは庇ってくれてありがとうござります」
深々と頭を下げる。

「あ…ああ。大したことば…」

「してないよ」といかけたが真澄が両腕を自分の首に回してきて
たので中断した。

「お…おこ。酒井。これは？」

戸惑う越野に対し相変わらず妖しい微笑の真澄。

「つふふふつ。あたしからの・お・れ・い」

言つなり唇を重ねる真澄。あまりに突拍子もない出来事に無防備だつた越野はもろに「唇を奪われる」。

「…越野さん。男同士でつ」

かすみが汚らわしいものを見るような目つきで言つ。

「はっ？！ ケータイ。ケータイ。撮らなくちゃ」

いきなり桜子は自分の携帯電話を探し始めた。そして目的のものを見つけると撮影を開始した。

（ああ。もう一つの悪癖。「貴腐人」ぶりまで…）

などと菊水が考えていたのが命取り。

「菊水さんもいい男よね。お近づきの印で」

いつのまにかそばにきていた真澄がその唇を重ねてきた。

「んーつ。んーつ」

据え膳食わぬは…とは言つものの元は男とわかっている。それにキスされてもたまらない。

もつとも本当の女としても人前では…

竹葉も虚を突かれて唇を奪われる。

すっかり女の人格なのが女子は完全にスルーの真澄。いよいよ課長相手だ。しかし

「酒井君。まずは呑もうじゃないか。それからだよ。男と女は、妙にＴＳ娘の扱いの上手い課長であった。

「はーい。真澄。飲みます」

酔っ払いのハイテンションで乗せられて、潰れるまで飲んでしまつた真澄。

「ひでえ田にあつた」

「メストラ」の被害に顔をしかめる男性社員三名。

「こいつは女。そういうことにしたじつ」

「もしくは犬に噛まれたと言つところですね」

自分の中で折り合いをつけるのが大変だった。

「さて。主役がこれじゃお開きにするしかないが…どうするかな？」

一応は男だし、君らのうち誰かが泊めてくれると助かるが」

しかし三人は青くなつて首を横に振る。それも無理はない。

「うーん。しかしウチも四人家族…いや。嫁さんのほうの従姉妹を迎えたから五人か。ちょっと無理だな。かといって守良くんや澤野くんにも頼めないし」

ここで桜子の名前を出さないのはみんなわかつていた。

「わかりました。責任とつてあたしが泊めればいいんですよね。まああれだけ呑んだらたつものもたたないし。そもそも今は女だし」なんとか運び出してタクシーで桜子のマンションまで運び込んだ。

「う…うーん」

うめき声で目覚める真澄。

「あら。起きた」

けろつとした表情の桜子はエプロン姿で味噌汁を作つてたりする。どうやらダメージはゼロらしい。

「吉野さん…オレ…」

飲みすぎてかすれ声。しかしこまだ女の声。本人はまだ意識がはつきりしないのかそれに気がついてない。

「初めてのお酒であそこまで弾ける人も珍しいわ」

「そつか…酔いつぶれて…なんだ？ 声が妙に高いな」

やつとそれに気がついた。

「そりゃ女なんだもん。そんな声でしょ」

「女つて……なんだあ？ こりやあ？」

半身を起こした真澄は自分のふくよかな胸元に驚愕した。皺になるからブラウスやスーツなどは脱がされたものの、正体不明になつたこともありランジェリーまで手が回らなかつた。

正確には自分のネグリジエを着せようと思ったものの、完全に酔いつぶれて重くて着せるどころではなかつた。

だからといって素っ裸にも出来ず、寝巻き代わりで下着のままだ。「驚いたわ。本当に女になるなんて。しかも服が変化する上に化粧までちゃんとしてるんですねもの」

「の…のろいは本当…あついつ」

頭を抑える真澄。「一日酔いだ。

「はい。お味噌汁。「一日酔いにはいいわよ」

「あ…ありがと「うやこ」ます」

あまりにとんでもないことで対処しきれず現実逃避で「普段の行動」をとってしまったか。

あるいは聞かされていたので覚悟が出来ていたのか。驚くほど普通の行動だった。

「姿は女ままだけど人格は男に戻ったようね」

「なんのことです?」

「憶えてない?」

桜子ははじめて真澄に今の女としての顔を見せた。ちなみにさすがに女性ならではの気配りで、マイクを落としてから布団に寝かされていてる。

そしてケータイの写真を見せた。そつ。男性社員相手にキス魔と化したあの写真。

「あ、」

「んふふふ。あー。いいもの見せてもらつたわあ。どうせなら男の姿だと完璧だつたけどねえ」

からかうための芝居ではなく、本氣で喜んでいたようだ。なんとも幸せそうな笑顔を見せる桜子。

「あ…ああ…」

一日酔いとは別の理由で青くなる真澄。布団にもぐりこんでしまう。

「どうしたの。お味噌汁冷めるわよ」

「もう…絶対に酒は呑まない。女にならない」
それは図らずも「一日酔いの後悔で「酒を呑まない」と自分で宣しているのと似ていた。

結局男には戻れず。しかし「一日酔い」を理由に仕事を休むわけには行かないと考えた真澄は無理をして出社する。

「や…やあ。酒井。大丈夫か。寝てた方が」

怯えているがフレンドリーなのは歳の近い菊水だ。

「大丈夫です。昨日はご迷惑をかけたようで、申し訳ありません」

しかし頭が痛むのか苦痛に顔が歪む。

「ホントに大丈夫？迎え酒するなら付き合つわよ」

「結構です！もう一度と酒を口にしたくありません」

(そりゃあそудらうなあ)

ほとんどの人間が心情を察する。

「それにしても困ったな。とりあえずは女子姿だが制服がない」

ボケている…と言うよりなんだかなれている課長の対応。

「もしかして…昨日は飲み会だったから会社帰りみたいな格好になつたけど、今ここで飲んだら〇〇になつたりして」

桜子は素面である。

「まっさかあ」

もつともな反応のかすみ。

「それに先輩。呑ませるッたつてオフィスにお酒なんて」

「田の前は酒屋じゃない」

課長が止める間もなく桜子は飛び出していた。どうも酒が絡むと人格が変わるようだ。

そして一杯の日本酒が。地酒とかではなく、どこにでもある大メイカーノの酒である。

助けを求めるように課長に視線を送る真澄。だが

「仕方ない。呑みなさい。どうせ制服がないし、女の姿では落ち着

がないだろう。場合によつては帰つていいくから。それなら呑んでも構わない。そうすれば吉野君も気が済むだろう」「興味しんしんで見ている桜子。確かに落ち着かないようだ。

「わかりました」

やけくそで真澄は一口飲む。安物が口に合わなかつたか途端に咽る。そして…また煙が。

「あら。やつて見るものね」

本当に制服姿になつていた。

「便利なもんだな。変身すると服まで変わるとか。ウチの息子は服のほうに体をあわせるから正反対だな」

「どうやら身内にこうこう体質の人間がいるらしい。だから落ち着いている課長。」

「どう? 気分は?」

「はい。なんだかお酒を呑んだのに酔いを忘れた感じですわ」

一口だがまた女性人格化したようだ。しかも真面目な〇〇にして

酒を呑んで何も出来ないビニルか、むしろ男のときより集中して仕事をしているようだ。

しかもきびきびした態度が課内を引き締め、いつになく能率が良く仕事がはかどる。

「うーん。職場で酒なんてとんでもないと思つたが、例外と言つのはどこにでもあるもんだな」

「ついでに言つと迎え酒で上手く行つたのなんてのも初めて見た」サブリーダーの越野が感心したように言つ。

それほど見事な仕事振りだった。

しかも変身して女心になつても、仕事に支障を来たすほどの酔い方ではないため間違いもない。

いいほうにいいほうに転がつていく。

もつとも本人としては大失敗をしでかせば、一度と酒を強要されずに済んだわけだが

よほどアルコールに弱いらしく、午後になつても女のままの真澄
だつた。そんなとき

「た…大変だ。みんな。抜き打ちで『い』隱居』がお見えになつたぞ」
頭の薄い冴えない中年が飛び込んできた。

「鳥山専務」と、秘書の丸さん

課長がつぶやく。

「なにを落ち着いているんだね。君は。お得意様の『い』隱居』のへそを
曲げたら大変だぞ。宇良くんか澤野君がお相手しなさい」

「えー」

「それはちょっと」

「いつぱしの〇〇」である一人がこねる。

実はこの「い隱居」。節原相談役はたいそうな「すけべ」なので
ある。だから相手は女性限定。

そのせいで大得意ではあるものの、女子社員には嫌われていた。

「あたしは前に酔った勢いで殴つたことがあるしなあ」

もちろん桜子の話。ちなみにこのときは「い隱居」も行き過ぎを
認め、不問に処された。

なにしろオフィスと言つのに無理やり酒を飲ませたのである。

もつとも桜子が舌なめずりをしていたのは言つまでもないのだが。

「あの……それならあたしが行きます」

志願する巨乳〇〇。彼女はセクハラの被害にあつてないからこれ
がいえた。

さらには前夜の醜態の汚名返上の意味も。

「誰だ君は。見たこともない」

鳥山専務が言うのも当然である。なにしろ真澄自身この姿は前日
の夜に生まれて初めて。

「まあまあ専務。ここは任せてみましよう」

「し…知らんぞ。私は。責任は君が取るんだぞ」

「お待たせしました」

お茶を持っていく真澄。

「ん？ 初めて見る顔じゃの」

「はい。酒井真澄と申します」

丁寧に挨拶する真澄。というか長い髪が零れ落ちる。

「ほつ。美人じやの」

すべきものの瞳の光。

「どうじや。となりにこんか」

「はい。では失礼して」

事前に逆らわないように指示されていたので、言われるままに隣に座る。

緊張した表情が老人の心を刺激する。

「うんうん。可愛いのう」

だいぶ心が女性のそれになっていたが、それでもこんなことを言われたことがないのであしらえるほどうまくはなかつた。

それがまた初々しくて節原の『萌え』を刺激する。

厄介者の相手を押し付けた形で後ろめたかつたか。

ドアを僅かに開けてかわるがわる様子を伺う同僚たち。

「あのジジイ。相変わらずのセクハラだな」

「気をつける。相談役といつても誰も頭が上がらないんだからな。暇ではあっても事実上トップに君臨しているようなもんだ。機嫌を損ねる形で契約を『破算にされたら大変だぞ』

だから言われるままに女子社員が相手しているのである。

「越野さん。大変。『隠居つたら』

いすみの声でみんながみると、なんと老人は紙パックの酒を真澄に差し出していたのだ。

「あ……あの……勤務中ですの……」

かすかに残る前夜の醜態の記憶。

そうでなくとも建前じやなくても勤務中に飲酒などもってのほか。まあ既にタブーを破つてはいるが…

「なんじや。ワシの酒が飲めんと」

不機嫌そうになる。空氣が悪くなる。そのときだ。

「飲酒を許可する。これは業務命令だ」

自らの保身に余念のない鳥山専務が乱入していきなり「お墨付き」にしてしまった。

言つだけ言つとひと立ち去つてしまつ。

「ほれ。お前さんとの専務もああこいつてる。呑め。呑め
セクシャルハラスメントとアルコールハラスメントを併発してい
る。

「は…はい。それではいただきまーす」

あちこちから呑むように仕向けられて、やむなく真澄は酒を口にした。

そしてあつとこゝう間に酔いが回る。

頬が赤くなり、目つきがとろけたようになりなんとも色っぽかっ
た。

さらに老人に絡みついて豊満な胸元を押し付けてくる。

「おー。おおー」

女子をからかっていた節原だが嬉しい「逆襲」に声を上げる。
「ねーえ。おじいさま。真澄、お願ひがあるんだけどなあ」
淫靡な響きの声色にまでなつてこる。

「おう。なんじや。言つてみー」

「ウチの会社に契約していくださらない?」

「そんなことか。つまり

いきなり仕事の話ではしゃうとするだらけ。もつともいはオフ
イスだが

「そんなこといわないでえ」

真澄は節原の皺だらけの手を自分のむき出しの太ももに触れさせ

る。さらに密着をしていく。

そして胸元のボタンを外してちらちらと谷間に見せる。拳句の果

てには開いていた節原の手を谷間に自ら導く。

「おおおおお。こりやたまらん。わかった。契約を回すよ!にしてやるから」

「賄賂」が効いた。

「さやーつ。ありがと!おじいちゃん。これはお礼よ」

電光石火の早業で真澄は老人の頬に軽いキスをした。

一部始終を見ていた同僚たち。

「あー。また後悔することになったわね」

「上手くご隠居の相手をしてくれたのは感謝だが」

「物凄く申し訳ない気が…」

「酒井さん。不潔!」

口々に評価をしている中で当の一人は酒盛りを続けていた。

電車の中。真澄はだいぶ酔いが醒めて来た。体より先に意識が男へと戻る。

途端に恥ずかしさで赤くなる。

周りの乗客はOしゃしい女がいきなり赤面したから、痴漢かと疑うが、すいでいて真澄の背後には誰もいない。

(お…オレは…酔った勢いでなんて恥ずかしいマネを…)

皮肉にも白い頬を朱に染めるその姿が可愛らしくて、無差別に男を興奮させていた。

今度は自宅に戻る。

一刻も早く文物の服を脱ぎたくて歩きながら脱衣。そして別のトランクスを身につけたときふと鏡に目を。

そこに映る姿は紛れもない女の裸身。腰に付けているのが男物の

トランクスでシユールな印象。

広いはずの肩幅は狭く華奢なで肩に。

スポーツで焼けたはずの肌は雪のように白く。
引き締まつた胸板は大きめの一いつの膨らみに。

元々引き締まつた腹部だつたが、こんな折れそうな細さではなか
つた。

足には無駄毛がまつたくなかつた。ビニからビニ見ても女の姿。

「……ねよう」

悪夢から逃れるために彼女は布団に入つた。

翌朝。

「ん…んん」

太い声のうめき声。その声でがばつと目が覚める。

「元に…戻つたのか？」

酒井はパジャマの前を開く。膨らみはなく、引き締まつた胸板に
戻つている。

起きぬけでトイレに出向くと歓迎会以来ご無沙汰だつた「男のシ
ンボル」が戻つていた。

「よかつた：一生あのままかと思つた」
安堵のため息。

着替えるためにベッドルームに戻る。そこには脱ぎ散らかされた
衣類が。

ただストッキングは紳士用靴下に。ショーツはトランクスに。ブ
ラジャーはランニングシャツ。

ブラウスはワイシャツへとそれぞれ戻つていた。

しかも足の無駄毛どころか、女になつていたにもかかわらず無精
ひげがきつちり伸びていた。

「不思議な話だ。だがもう一度と酒は呑まんぞ。そもそもオフィス
で飲むなんてのが例外中の例外だ。そんなことはあれつきりだらう

やつ思ひのを樂觀視と言ひのは酷であらひ。

出勤した酒井は自分の耳を疑つた。

「いやあ。昨日の謎の女子のおかげか、つむぎに契約が舞い込んできてね」

ほくほく顔の鳥山専務。

「なんでもじ隱居はこの仕事を依頼する相手を探していたらしき。あの接待で落ちるんだから拍子抜けだが」

青くなつていた酒井。

「そんなわけで彼女のためと言ひ特例で飲酒を認めよひ（なんてこつた…業務命令で呑まされる…）

上機嫌の専務が立ち去り残された面々。

「あの…オレ…」

「酒井。諦めてくれ。じつは体質はおもちゃになる運命なんだ」課長が諭すよひに言ひ。小声で会話するかすみといづみ。

「それにも一村課長は何であんなに冷静に扱えるのかしら？」
「噂じや課長の高校生の息子さんが同じような体質らしいわよ

硬直する酒井の肩をぽんと叩いたのは桜子だつた。

「吉野さん。オフィスで酒なんて非常識ですよね」

「うん。でも良かつたわね。公認でお酒飲めるわよ。しかも経費だし

「経費」

そのタイミングで来るから恐ろしい。

「ちわー。酒のゲキヤスです。」注文のビール1ケースと日本酒一升。ウイスキーですが…ほんとにここでいいんですか？

贈答用ならまだしも…怪訝な表情の酒屋だつた。

「はーー。いいですよ。ほりほり酒井君。あなたのなんだから運ぶの手伝つて」

ついでに自分が飲むつもりの桜子が、にこにこと作業をする。

本気で辞表を提出しようかと考える酒井だった。

一杯目 吞まれたら女の手?（後書き）

酒を呑んで調子に乗って色々やつて、冷めてから激しく後悔というのと

TJS娘が調子に乗って女としていろいろやつて、元の姿に戻つてから猛烈に恥ずかしくなつて後悔するのが似てるなあと思つたのがきっかけです。

登場人物の名前はほとんどは日本酒の銘柄です。

「吉野」も「桜子」もそうです。

「宇良かすみ」と「澤野いづみ」は姓名合わせてで

ちなみにサブタイは元の方では熟語でしたが、「セーラ」と区別するため新規につけました。

今回もお読みいただきまして、ありがとうございます。

城弾

一杯目 吞まれたら外国人？

月曜日に新しい勤務地である本郷支社へと向かい、その夜の歓迎会で勢いから禁じられた酒を呑んでしまい。酔うと女性へと変身することが判明。

しかも心までが女に、それもどちらかと言つと色ボケ氣味に。さらには好色の「お得意様」に気に入られて、専門の接待要員に。つまり仕事で酒を呑み、女にならざるをえない。

まさに人生観の変わりかねない一週間の激務を終えての土曜日。酒井真澄は都内の実家へと舞い戻っていた。

体質…呪についての詳しい話を聞くために。

「父さん。何での『酔つと女になる』体質を教えてくれなかつたんだ？」

居間に上るとスース姿のまいまきなり怒鳴る。

「なんだ？ なつちまつたのか？ 女に」

「うつ」

つまりそれは禁を破つたことを意味する。口もるものも無理はない。

「オレは禁じたはずだぞ。呑むなつて。それさえ守つてつや女にならずにすんだはずだ」

酒井をそのまま老けさせたような初老の男が面倒くさそうに言う。休日の自宅と云つことでラフな格好だ。しかも寝転んだままだ。

「それにしたつてあんなこととわかつていたなら」

憤慨している酒井は收まらない。しかし老齢の男性はまるで意に介してない。

「今更そんなこと言いに来たのか？ そんなことよりチャンネル変えてくれ。10番だ」

「……父さんの方がリモコンに近いじゃないか」

この父親。酒井和水は横着な人物であった。

眞面目に話を聞かない父相手に、かなり険悪になりかけたところを救つたのはやはり女性である母。

「はいはい。真澄。座りなさい。まずはご飯食べましょ。ハイ。これでも呑んで落ち着いて」

母親が透明な液体の入ったグラスを父と子に渡す。

熱くなっていた二人は何も考えずに受け取り、そしてにらみ合つたまま呑んでしまい

「ぐえほげほげほげほ」

激しく咽た。

「か…母さん。これ」「酒じゃないのか?」

親子揃つて打ち震える。

「まずは実際にご対面。楽しみだわあ。真澄がどんな女の子か。父さんのも久しぶり」

ボボボンッ

言つているそばから両者の床の辺りから「浦島太郎が玉手箱を開けたとき」を連想させる煙が上がる。

次の瞬間、息子である真澄はスース姿のビジネスマンスタイルから、ピンクのセーターとロングスカートの巨乳娘に。

髪の毛は二つの房を後ろにたらすツーサイドアップと言つそれに。父である和水は和服姿は同じだが留袖姿の熟女に。やはり胸の大きな美女だ。

「男同士でケンカになるならみんな女になればいいのよ。男は人付き合いへタだけど、女は上手いから」

さらりと言つ母親に毒氣を抜かれた二人はへたりこむのであった。

「あらあら。間違いなく血筋だわ。よく似た母娘になつたじやない」

産んだほうの女親ののん気な一言。

「もう。騙すなんてひどいじゃない。ママッたら。あたしのお酒は
一ガテなのよね」

すっかり甘えた娘になりきった真澄の口調。
「ガマンしなさい。そういう呪いなんだから
女性化した途端に文字通りに「襟を正す」和水。寝転んだ体勢から瞬時に正座に。

一部の隙もない姿勢になると「妻」を見上げる。

「それより母さん。さつきから匂い嗅いでいると思つただけで、もう煮物を出すの?」

「ええ。そろそろいいわよ」

「ダメ! まだ全然煮えが足りないわよ。ああもう。なんだって本物の女なのにあなたはこづぼらなのよ?」

言つなり和水は立ち上がり台所へ。そしててきぱきと仕事をする。「……信じられないわ……パパッたら、普段は縦の物を横にするのも面倒くさがるのに」

「久しぶりに見たわね。普段はテレビのチャンネル変えるのも人任せなのに、女になると途端に細かくなるのよね」

懐かしそうに言つ母。悦子。

「あ……ママ?」

闇が悪そうに切り出す真澄。いわば娘としては初対面だ。しげしげと顔を見ている悦子。やがて笑顔を見せる。

「初めてね。真澄。あなたのその姿は。可愛いじゃない。お父さんと同じで自動的にお化粧もされるのね」

「うん。実はこの体质で色々尋ねたかったけど……あのパパを見たらなんだかどうでもよくなつて……」
なにやらうずうずしている。

「真澄もする? む料理」

「うん」

女三人で台所仕事だった。

「やっぱり女の子ねえ。それにこうしてしまえばみんな女向けの味

付けでいいし」

実はそういう狙いもあった。したたかな女性である。

そして夕食。既に酔つてしまつたせいか酒に対して抵抗がなくなり、この際だからと漬れるまで呑んで、そして話した。

しかしそれまでほとんど呑んだことがない上に、女になつて肝臓が小さくなりアルコール処理の弱くなつた真澄はやはり悪酔いして、自分の着ていた服を汚す羽田に。

翌朝。

「うう…頭が痛い…」

真澄は痛む頭を抑えつつ目を覚ました。

そして自分がネグリジエを着せられていることに驚愕した。

スケスケとかはいわないものの、フリルがどう見ても多目だつた。

「…これ…姉ちゃんのじや」

「ええ。さくらのよ」

一つ年上の姉。さくらはいまだ独身。家族と同居。この土日は女友達と旅行だつた。

「やっぱり姉妹だけによく似てるわね。お化粧を落とすとなおさらだわ」

「ううー。ネグリジエなんて…恥ずかしい」

既に心だけ男に戻つている真澄は恥じ入つた。

「なんだ真澄。まだ寝巻き姿では呑んだことないのか?」

男物のパジャマに着替えていた和水が起きたるなりそういう。

「酒は出来るだけ呑まないようにしてたんだよ。女になると男では考えられないほどエロくなるし」

「そりだらうな。オレも若いころは何度か朝起きたら隣に男がいたことあつたし」

こきなりのカミングアウト。もつとも母親は承知の上らしく驚か

ない。

しかし「実例」を聞かされた真澄はたまらない。
(ほ…本当にそこまで突っ走るんだ…絶対に呑まないよ!しない
と…)

「あああ。朝(じ)はんにしましょ。真澄。今日もお休みでしょ。夜までいたらさくらも帰つてくるから、久しぶりに家族で食事よ」「それまでに戻れるかなあ」
すきすきとする頭が酔いの深さを物語る。
「なに言つてんのよ。家族で何を恥ずかしがつてんの?」「母さんはあんなふうに飲ませなきや」「だつてああでもしないときつとお互いに言いたいことも伝えられなかつたわよ」

確かに実際に父親の変身を見て血筋を理解したし、自分の変身で状況を伝えられたようだ。

それを見越した母の作戦と言つなら見事である。
「母さんも結構呑んでいたのに平氣なんだね」
「母さんは新潟の出よ」
酒どころである。ちなみに前夜父と子に飲ませたのも、安物ではあるが新潟産の酒である。

朝食を採りへつひぐ父と息子…いや。肉体的には母と娘と呼びづべきか。

洗濯機のまわる音がしてゐる。そんな普通の日曜日。何の気なしにテレビを見ていたら真澄の携帯がなつた。
「はい。もしもし」
『酒井君? もしかして女の子になつているの?』
「あ…吉野さん。ハイ。ちょっと実家で呑んじゃつて…」
電話の相手は真澄の同僚である〇。吉野桜子。
有能な美人〇しだが、ヤオイ趣味ののんべなのが困つた人である。

『それでもいいわ。急な仕事が入ったの。明日代休取れるからこれから来てくれない？ みんないるけど手が足りないのよ』

「え…でも今の俺…」

『『隠居相手にしているときはいつもその姿でしょ。構わないから早く来て』

相當に切羽詰つているらしい。思わず了承の返事をしてしまった。

「仕方ないな」

真澄はネグリジエを脱ぎ捨てる。ショーツ一枚だけの姿。もちろん胸は何もない。

「母さん。会社に行かないといけなくなつたんだ」

「あらあら。でも洗濯しているのよ。あなたの服

そう言えばタベ汚したな…それを思い出した。

「いいよ。何か適当に借りるから」

父親の服を借りようとしたがズボンは極端に尻が大きく不恰好に。ワイシャツに至つては胸囲が男性のときより下がっているにもかかわらず、極端に前に出ているためやはり形が逢わない。

「真澄。とりあえずさくらの服を借りなさい

「うう。仕方ないか…」

家系のか姉も胸が大きい。そのためかまるで真澄本人のもののように女性用スースイがぴったりとフィットする。

「それじゃ後はこれ飲んで」

前夜の記憶が蘇える。一応においを嗅ぐとかすかに酒とわかるにおいが。

「母さん。俺はこれから仕事に行くんだよ？」

言つと真澄は出て行こうとする。しかし履いてきた靴がぶかぶかで合わないため、これまで姉の靴まで借りる羽田に。

「ちょっと真澄」

しかし彼女は出て行ってしまった。悦子はおろおろして女姿の和水に視線をよこす。

「放つておけ。一度痛い目を見れば理解できるだろ。そもそも靴が

変化しない時点で気がつかない辺りが間抜けだ

洗濯をするのだからポケットの中身はすべて出している。
だから財布も定期も搜すことなくタンスの上においてあった。
もつとも通勤ルートではないので切符を買う羽目になつたが。
眞澄はもつとも早く会社につけるルートを路線図を見て考えていた。

電車に乗れば乗ったで仕事をすること。だから自分のこれから来る危機に気がついていなかつた。

程なくして職場の最寄り駅に着く。
さすがにタクシーを使うほどの距離でもないためここは歩く。
ここでタクシーを使って会社に横付けしていれば、あんな悲喜劇は起こらなかつたが

もう少しで会社と言つといひでだ。再び煙が舞い上がる。
(え? 飲んでないのに?)

そう。それは呪いが解除される時の煙だ。つまりすっかり酔いが覚めたのだ。

そこで悲喜劇は起きた。
パンストを借りなかつたためスカートから覗く脚の毛がびっしりと。

前がきつかった胸元は横幅がきつくなる。
そして頬をくすぐつていた髪が一気に短く。
その頬をなでると無精ひげが。
要するに…男に戻つてしまつたのだ。しかも衣類は文物のまま。
不幸中の幸いは化粧をしてなかつたこと。この状態でではかなり困つた顔になつていただろう。

「わ…わわっ」

人に見られまいと慌てて近くの公園に駆け込む。植え込みに飛び

込んだ。会社までは500メートルなのに…

(な…なんで? 服も一緒に変わつてしまつはずなのに…あ。これは違つ。姉ちゃんのだ。起きてから着替えている。この服は飲んだときには着ていない)

つまりは変化していないので。だから酒井が元に戻つてもこの服は「もとの女物」のままなのだ。
履いてきた靴が飲んだときには脱いでいたため変化してなかつたことに気がつけば、まだ回避できたかもしれないが。

その頃、酒井家では酒井の着ていた服が元のスースに戻つていた。
「あらあら。あの子つてば。酔いがさめたみたいね」
「どこで戻つたが問題だがな。まあ今なら携帯電話もあるから助けを呼べるか。オレの時なんざそんなものないから近くを探してだな

…」

酒井は草むらに隠れていた。

幸い公園といえどそんなに人目がない。何とか隠れていられた。
息を潜めていたら携帯がなつた。慌てて出ると桜子だつた。
『ちょっと酒井君。いつになつたら来るの?』
いつまでも来ないから切れ氣味に問い合わせ。
「いや…それどころじゃなくて…」

『……男の声ね…』

勘がいい…むしろ妄想慣れしていた。切れていたはずが状況を楽しむように。

『……はつはーん』

それだけで事態を把握したらしい。

「と…とにかく助けを」

『わかつたわ。場所はどこ?』

公園に隠れている事を伝えて通話を切る。

「探し物ですか？」

ほつとしていたところに声をかけられて驚愕した。植え込みの中に「先客」がいた。

やはり若い青年だ。細身で中々の好男子だ。

「わたしもメガネを落としてしまって探しているんですよ。見ませんでした?」

「あ…あの…」

この青年は田が悪いらしいが、自分がその裸眼でのように見えているのだろう。

女物のピンク色のスーツを着ている青年である自分を。

「ああ。失礼。僕は諸星といいます。お嬢さんも探し物ですか?」「どうやら服の印象で女に思われたらしい。むづむづないう人々が女顔。

きちんと髪を処理して、化粧をして夜の闇でなら女で通るかもしない顔。

「えと…その…」

言ひよどむ。それはそうだ。

どうやら言いたくないと判断した諸星は話題を変える。

「うーむ。裸眼でメガネを探してもらちがあかないな。仕方ない。

頼んだぞ。ミクラス。ウインダム。アギラ」

連れていった3頭の犬を解き放つ。やがて一頭が派手な赤いメガネを探し当てる。

「ああよかつた。壊れていないうらしい。それでは……でゅわッ」

メガネを思い切り前方に突き出して顔にあわせるという派手な仕草でつけた。

視界がはつきりして見えたのは女装の青年。フリーズした。

「…………」

物凄く居心地の悪い酒井。情けない声を出す。

「ど…どうも」

「はじめましてえ」

声は上からした。

「吉野さんー？」

上を見ると確かに吉野桜子が。どちらかと言つと「カメコ」が持ち歩いてそうな大きなカメラで酒井を写す。フラッシュショーフラッシュショ。肖像権まったく無視。

「わわっ。何するんですか？」

「こんなおいしい場面を撮らないなんて女が廢るわよ。もう。酒井君てば。なんてわたし好みのことをしてくれるのかしら。欲を言えばちゃんとお化粧してカツラもほしかったけど」

「は…早く助けてくださいよ」

泣きそうな懇願。

「仕方ないわね。ほら」

安酒を差し出す。

「うう。やはりこの手か」

諦めて酒井はぐいっとあおる。酔いが回った途端に煙と共に女姿に。

今度は着用してから飲んだので服も変化。真澄に完全にフィットしていた。

「助けてあげたんだから今日一日私のことは『お姉さま』と呼ぶようだ」

「はい……お姉様」

犬よりも力関係が厳しかった。

「それではごめんあそばせ」

「ごきげんよう」

笑いながら唖然とする諸星をおいて歩いていく二人。

一人が去つてから彼はぽつんとつぶやく。

「うーん。やはり東京は凄いところだ。神戸で羊の世話をしても暮らそうか」

オフィスに着くともう一度呑む。これで制服にまで変化。さらには

は〇レモードになっていた。

「見慣れたはずだが便利なものだと思つよ」

自身も「服に着られて女になる」息子を持つ一村課長が言つ。

「申し訳ありません。早速仕事に入ります」

酔つているのにきりりとする。

確かに肉体的には酔つている。だから女性化している。

しかし泥酔と言つわけではなく、そのため乱れてはいない。

心は女になる。眞面目で勤勉な〇レに。

以前の時は分量を間違えた上に、居酒屋だったから思い切り碎けていた酔っ払いぶりだったが、オフィスで少量のせいかうまくあつていた。

ただし酔いがさめると仕事人としてはよくても「女装」になる。だから醒めて来たらまた適量を飲ませないといけない。

中途半端な女装状態では仕事にならない。

もつともいつもなら飲ませたがる桜子が今回はおとなしい。

その「女装」状態になるのを狙つているのはみえみえだった。

三時が過ぎて、ビーフカツアンドライスは引き上げられそうな目処が立つ。

みんなでお茶だ。眞澄も調整と一服でコーヒーだ。

ちなみに普段はブラックだが女性化したらシュガースティック一本と、ミルクをいれて飲んでいた。

着替えがないため女性でいないとならないが、肉体だけなつていればそれでいい。

だから変身が解けるまでは酒を呑みたくなかった。

「課長。お客様です」

髪の毛を「ひつ詰めた〇」と言つより少女が来客を告げる。

「どうやら同様に休日出勤を余儀なくされたらしい。

「恵里衣くん。『苦勞さん』

同姓がいるため名前で呼ばれていた。

「ところで課長。かすかにアルコールのにおいがします。もし飲酒しての仕事なら、それは業務にさしつかえる確率が85%で…」

「恵里衣くん。お密様と言うのは?」

「そうでした。どうぞ」

機械的に挨拶して来客を通す。

「父さん? 母さん?」

既に元に戻った父親。和水と共に母・悦子がやってきたのだ。

「皆さん。真澄がお世話になつてます」

悦子が深々と挨拶をする。

(「この人が…）（酒井さんのお父さんなんだ?）

宇良かすみと澤野いずみはひそひそとナイショ話。

男たちもそれを咎めない。気になるのは同じだからだ。

(「この男性も酒井真澄みたいに変身を?）

「どうやらその疑問をぶつけられるのは察していたのか、やや引き

氣味の和水。会釈だけする。

「これはこれは『一撃』に。息子さんは大変よくやつてくれています」
課長の言葉は社交辞令ではない。実際に酒井真澄は有能な社員だった。

「ただし…彼のために吉野桜子が暴走するのに目を瞑ればの話だが。

「二人とも何しに?」

「バカもん。お前のために着替えを持ってきてやつたんだ。ほれ。
靴もだ」

それは実家においてきた自身の服一式と靴。

「あ……そうか。それじゃ…課長。ちょっと着替えていいですか?
姉の服を借りているからこれをもつて帰つてもらいたいんで
「ああ。どうせ休憩中だし…女子更衣室使つていいから」

「お待たせしました」

その姿はアキバ系でないはずの彼らにも『萌え』と並んで単語を脳裏によぎらせた。

まだ女性の肉体のため、着ていた男性服がぶかぶかなのだ。それが逆に女性の肉体の華奢なところを強調していた。

「それじゃ酒井君。ぐいっとあおってみよ!」

冷蔵庫から安酒を取り出す桜子。

「いいですよ。もう。ちゃんと男の服が戻ってきたし。このまま元に戻るだけだし」

「でも酒井君。靴が合わないわよね?」

「う……」

酒井自身の靴は26センチ。女性化すると22・5センチ。

「ほりほり。ぐいっとやつなさい。あたしも付き合つたげるから」「いや……でも……もつちゅつと待てば」

「なによ。『お姉さま』のいうことが聞けないって言つの?」

「真澄。職場で飲むのか?」

そりゃ父親が怒つても不思議はない。

「いや。これには事情がありまして」

代りに課長が説明をした。

「ふむ。それも業務の一環なら仕方ありませんな。ならむしろ好都合。真澄。お前が知りたかったその体质にはまだ続きがあるんだ」「え? 酔うと女になる。そして場所にあった服装に変わるだけじゃないのか?」

「それはただ酔った場合の話だ。混じり物のない『地酒』とかを飲むと影響力が段違いだ」

そう言えば経費と並んで安物しか飲ませてないわね……桜子はそう思つた。

「論より証拠だ。どうせ呑むと言つならこれ呑んでみる」

手渡されたのはドイツ産のビール。

「外国の酒がどうしたって？」

「いいから飲んでみる。半分で充分だろ？」

「服をフィットさせる都合もある。仕方ないので缶を開けて半分を

ゆっくり呑んでいく。

酒に強くない真澄はそれで充分に酔えた。

ぼんつ

そこに現れたのはO-L服に身を包んだ真澄……ではない。
髪をオールバックにして軍帽を被り、そしてサスペンダー式のズボンをはいていた。

上半身には軍服を羽織つていて、下着もシャツもつけていない。
豊満な胸の先端をサスペンダーが隠していると言ひ、映画会社に怒られそうな衣装だった。

「あ…酒井君？」

さすがにこれは予想外の桜子が、恐る恐る尋ねる。
田の据わった真澄が右手を高々とかざす。

「ドイツの酒はアアアアア、日本—イイイイイイ

「と、まあ。世界の酒を呑むとその国のイメージに引き摺られてな
あ」

ぼやくよつと言つ和水。

「どうでもいいけど酒井。それ日本語おかしくないか？」

先輩の男性社員。越野が指摘する。

「まあやつぱり酔つ払いつことだな」

これも先輩の竹葉^{ちくは}が言つ。

「なんだ貴様^{ご様}。わたしに逆らつとはい一度胸だ。軍法会議にかけてやるぞ」

「…なりきつてる…」

年のそれほど違わない菊水がつぶやく。

「多少は本人の持っているイメージも関係あるらしいんですよ
さすがに他人の前なので口調は改めている和水。

「酒井つてミリオタ?」

「というかむしろドイツのイメージを間違えていると言つか…」
日々に評している。その間、当の本人はサスペンダーが一センチ
ずれると大変恥ずかしい状態のまたたずんでいた。
どうもいきなりハイテンションになつたのはいいが、酔いがきつ
くなつてきたらしい。

「面白いわね。じゃ次は…」

舌なめずりをしている桜子。それを悦子が止める。

「待つて。今はまだダメ!」

「どうしてですか?」

「まだ心が女みたい。その状態で飲ませても前ののが残つていて、お
酒同士でケンカするのよ。そうなるとこういう特徴が出なくなるの」
「なるほど。今まで安いものばかり飲ませていた…つまり純度が
低かつたからこういう特徴は出なかつたんですね」

しばらく待つことにした。

「酒井君。大丈夫?」

ほぼ裸の胸を押さえて蹲つている真澄に、上から尋ねる桜子。真
澄は真っ赤な顔で上目遣いで見てくる。

「大丈夫じゃないですよ! 何でこんなきわどい服に…」

「あ。心は男に戻つたみたいね。じゃあこれいってみよう!」

本当に僅かな量の液体を差し出す。

逃げられそうにないし、とりあえず酔えば別の服になるだろうし、
女になりきつてしまえば女性服を着ている羞恥心も消えるだろう。
そう思つてその液体を飲んだ。

長い髪は一つに分けられて編みこまれ、それをぐるぐると「お団子」だ。

化粧もアイシャドウの赤が目立つ。

そしてプロポーションをくっきりと際立たせたチャイナドレス。深いスリットがまぶしい太ももをひらひらと見せていた。

「あいやあ。わたしまた酔ってしまったアルよ」
扇であおぎながらおかしな言葉の真澄。

「なるほど。紹興酒だからこうなるわけね」

中国の酒である。お燶して氷砂糖と言つのみ方もあるが、この場合は常温であった。

「つーん。しかし語尾に『アル』ってのは… 最近のアニメだとまず変更されるからな」

「菊水。何の話だ？」

「いえ。なんでもないです。課長」

打ちひしがれる真澄。

「ああ…なんてべたな口調の中国娘を…」「そっちかい！」

「ハイハイ。呑んで忘れましょうね。次はこれ」

これまた常温が適温であるスコッチウイスキーを飲むと…

真澄は一心不乱に掃除をしていた。

長い髪は纏め上げられていた。

黒いワンピースに白いHプロン。

「うん。やはりメイドさんはイギリストyleに限るわね。アメリカンタイプはどうもねー」

桜子は女性と言つのにメイドに詳しいようだ。

やがて作業が終わりメイドの真澄が直立不動で桜子に報告する。

「桜子お嬢様。床掃除は終わりました。次はいかがいたしましょう？」

「そうねえ……」

従順なメイドと化した真澄を值踏みするよつに見る。そして悪戯するような表情に。

「よし。跪いて私の靴をお舐め！」

「仰せのままに」

本当に跪いて桜子の靴に顔を近寄せる真澄。

「いかん。止める」

課長の命令で引き離される一人であった。

壁に向かつて体育ずわりしている真澄。黒いオーラが出ている。「いいわねえ。今度帰つてきたらウチでもスコッチ飲ませて手伝わせようかしら」

あつけらかんと言い放つ悦子。人事ではない和水は苦い表情で黙つたままだ。

「まったく…少年少女文庫向けだつたからそれですんだが、18禁OKのところだつたら何をさせるつもりだつたんだ？」

「そりや当然、殿方のズボンのチャックを開けさせて…」

「やめてください…！　ああ。自己嫌悪で消えてしまいたくなつてきた…」

「はは。じゃ最後にしましょうか。ちょっときついから水割りにする？」

散々おもぢやにして満足したのか打ち止めを宣言。
これが最後と言つことでバー・ポンを飲んだら…

結果としてはテキサスのカウガールになってしまった。

「Oh！　カチョーさん。今日は迷惑力マース」

やたら陽気に、それもおかしな日本語で喋る。

「よかつた。これならうるさいだけだ。万が一口デオとか称してバ

イクを馬に見立てて乗り回しだしたら飲酒運転だしな

「そうですね。時節柄酔払い運転はいつも以上にまずいでしょう」

立て続けに違う変身をさせられた真澄はくたびれて眠ってしまった。

「まあ五時までやつていた扱いにしてやひつ。その分は吉野君から引きたいところだが」

「えーっ？ でもこれでやつちやいけないことがわかつたじゃないですか。『隠居の前にメイドで出したらロストバージンくらいはありますよ。その危険を見抜けただけいじじゃないですか』

「……まあいい。えー……」

両親の前でおもちゃにしてしまってさすがに言葉のない課長。

「いいですよ。とにかく痛い目を見ればこれも自分がどれだけ因果な体質かわかるつてもんです」

「でも酔った勢いで他所の娘さんを妊娠させたりはしないでいいわよ

「妊娠させられるかもしねないだらうが

「十月十日も酔っ払えるわけないでしょ」

それが理由で過去に一生を女で過ごした先祖はいない。

老夫婦は同僚たちに向かつて改めて挨拶をする。

「なにかどご迷惑をかけると思いますが、ウチの『娘』をよろしくお願いします」

「確かに『娘さん』はお預かりいたします。どうかご安心ください

両親と同僚に娘扱いされているとも知らずに真澄は酔いつぶれて眠っていた。

翌朝。代休日。

「アーッ…昨日はひどい目にあつた」

立て続けの変身で疲弊しての眠りだったものの、酔いつのものは軽くて朝には男に戻っていた酒井である。

トーストをかじりながら「コーヒーをすすつていた。むらた新聞も。「タバコ増税で値上げ…か…酒も200%くらい税金かけてくんないかな」

世界の酒好きをすべて敵に回しかねない発言であった。それほどまでにもう呑みたちはなかつた。

チャイムがなつたのでインターほんで確かめると桜子だった。

「とりあえずあがつちやつてください」と扉を開ける。

桜子はリュックサックをしょつていた。

「なに?」この荷物

猛烈に嫌な予感が。

「うん。昨日の続き。安心して。ちやんとつまみもあるから。ウオツカでしょ。ジンでしょ。テキーラでしょ」

色とりどりの酒瓶を並べ始める。酒井は思わず叫ぶ。

「酒税300%希望!」と

三杯目 吞まれたら童女？

酒井真澄の努める部署では朝礼がとりおこなわれていた。そんなに大げさなものではなく、輪になつた状態で一人の青年が挨拶をしていた。

「福岡支社からこのたび本郷支社に配属となつました山崎さうじです。よろしくお願ひします」

深々と礼をする。顔を上げると笑顔。少々演出過多に取れるが悪くない印象だ。

髪はやや長め。営業課といつてことを思つとちよつと冒険かもしれない。

精悍なタイプの好男子。身長はそれほど高くはないが引き締まつた肉体をしていた。

それを包むスーツも値段は高くはないがセンスのよさを感じさせる。

しかし何より注目されたのはその「名前」

(きらいら? 男につけるにはちょっとと度胸のいる名前だな)

三十台の社員。竹葉(ちば)が率直な思いを抱くが口にはほしない。

全員が同じ感想を抱いていた。

たぶん当の山崎自身も「そう思われてくる」と承知の上だらう。

「あー。ちよつとした事情でついで仕事をしてもらつことになつた」課長が説明する。ほんの一瞬、視線が酒井に向いていたように感じたのは当の本人。

(何だ? 今の意味ありげな視線は)
だがすぐに視線が外れて桜子に向く。

「吉野君。今日は彼を君が案内して回つてくれ

「わかりました」

課長が指示をして、部下が了承した。それで終わる話の筈だった。

「課長。できれば案内は女性よりも男性の方が」

それを切り出したのは山崎本人。

「そうか。それなら酒井…も、まだ日が浅いな。菊水。頼めるか?」

二十代後半の男性社員に打診する。

「あ。はい。それはいいんですが…」

菊水は同僚である桜子に配慮する。

なにしろ「女よりも」と言われた形だ。「女のプライド」を考えれば面白いはずはない。

事実に表情が硬かつたのが感じ取れたが、山崎の台詞でその表情が一気に崩れた。

「お願いします。右も左もわからない僕にとって、あなただけが頼りなのですから」

低い位置からやや上目遣いになつてすぐるよ。

「丁寧に両手で菊水の手を包み込んでいる。

これで一気に機嫌の直つた貴腐人。目を輝かせている。

「そうよね。女なんかより男同士よね。わたしどらヤボでごめんなさいねえ」

高く作った声で才ホホ笑いをしながら身を引く。

「あ、あの…吉野さん？」

上機嫌の桜子と裏腹に青ざめる菊水。

助けを求めていた表情の菊水が「絶望した」といわんばかりの表情になつたのを全員が気づいていたが見て見ぬ振りをした。

男は我が身に降りかかるぬよつにと。

女子は「こんないいものを生で見られるなんて」と。

空気を変えるべく課長が次の言葉を紡ぐ。

「あー。それじゃ吉野君。君には」

「はーい。歓迎会ですね。それなら既にピックアップしますよ」

元々有能だが酒が絡むとなおさら頭の回転が早くなる。

すっかり上機嫌の桜子が課長に言われる前にプリントアウトした

「くいなび」のページを見せる。

「相変わらず手回しがいいな」

苦笑する課長。それをよそに菊水相手に過剰なスキンシップをしていった山崎は

「あ、できれば個室のあるところがいいですね」とリクエストをしていた。

「あら。なーに。男同士一人きりになりたいの?」と余計な気を回す桜子に

「改めてする自己紹介でちょっとね」と。

一日の業務を終えて夜の街へ繰り出す一同。

予約していた「伊丹」というチーン店に出向いた。

平日だったので楽に取れた。

山崎のワクエストビオットに個室だ。むしろ「隔離」という方がしつくり来る。

掘りごたつ式の部屋に通される一同。

主役である山崎が「神座」。そこから時計回りで酒井。吉野。菊水。

山崎の向かい合わせで課長。ここから座席が反対側になり澤野。宇良のO-Lコンビ。

31歳の中堅。竹葉が山崎の隣。

「それでは、山崎きらら君を歓迎して乾杯!」

課長自らの音頭でジョッキやグラスが掲げ上げられる。

桜子はこきなり「コップ酒。酒井は烏龍茶。他は全員ビールの中生だ。

「いやあ。それにしても移動先にこんないい男たちがそろつてて嬉

しいですよ

『女たち』の間違いと思いたかつた菊水と竹葉。そして酒井。

「お前…もしかしてそっちの気があるの?」

ストレートに菊水が尋ねる。案内の最中やたらにスキンシップを図られて辟易としていたが、もし『そっちの気がある』ならある意味納得だと。

「いたつてノーマルですよ。僕は」

「普通の男がやたらに男相手に触るか?」

「納得させてあげますよ。ただちょっと僕は酒に強いもんだから時間が

(何で酒が?……まさかっ!?)

一同が酒井を見る。当人も考えが及ぶ。

「さて。そろそろかな」

山崎が言つたとたんに彼の足元から煙が上がつた。

「えつ?」

課長以外の全員が驚いた。特に酒井が驚いた。

時には予想が的中して驚くことがある。今がそのときだ。

(ま、まさか。しかし親戚にはこんな奴いないし)

そして煙が晴れたら予想通り山崎の姿はない。かわりに美女がいた。

髪の毛は金に近い茶色のソバージュ。化粧もきつい。特にくつきりとした口紅の赤さがケバさを醸し出していた。

暗い飲み屋でくつきりと見せる目的ならなるほどと頷けるメイク。体にフィットしたヒョウ柄のワンピース。それが浮き彫りにするボディラインは凄まじい。

胸はとにかく自己主張が激しく。ウエストのくびれも本物の女以上だ。ヒップは文字通りの安産体形。

どこからどうみても女。それも場末のバーにいるようなホステスのようだ。

「や、山崎君…なの？」

「はーい。きらりでーす」

若干ハスキーな声で可愛らしく返答する。

なるほど。酔えば女になるのがわかつてれば最初から女で通用する名前をつけるか。

納得した一同である。

「キヤハハハ。ビックリした？ ねえビックリした。きらりねえ、朝からもうこれをずっと楽しみにしてたのよあ」

「悪戯」が成功してご満悦の姫様。

（同じやつが先にいればそりゃこっちにまわされるか。扱いなれるつてことだな）

同時にやたらに男である自分にモーションかけてきたはずだ…と菊水は納得した。

「もしかして課長。知つてました？」

サブリーダーでもある竹葉が尋ねる。

「ああ。ウチのせがれが似たような体质でな。それで任された。酒井の時は半信半疑だったが」

「はっ？」

桜子は慌ててバッグを手繕り寄せる。そして中から小型のビデオカメラを取り出す。

「酒井君のために購入したけど、まさか他にも使う相手が出るなんて」

「どこから突つ込んでいいのか見当もつかない酒井だった。

そして桜子の期待通り。いきなり過激な挨拶：キスを菊水相手にかましているきらりだった。

だが菊水より人生経験の長い竹葉はさすがに一度の失敗（VS真澄）で懲りている。

「ま、待てっ。山崎。お前は男相手にキスして気持ち悪いのか

「なんで？ 今は女やけん。平気とよ」

どうやら女性化すると言葉遣いまで変わるらしい。

「大体ウチのとーちゃんからしてそんなんよ。大昔に、先祖様が呪われてその家系とか。とーちゃん直系なんだけど女になつたのを実は喜んでて。もう随分いろんな男の人と寝たらしいぢや」

眩暈を覚える酒井。自分の父もそれに近いことを話していた。

（お、俺も酔つたらやばいのか？　だとしたら…そうでなくとも絶対に飲みたくないが…）

「今でもほとんどは酔つ払つて女で過しとーよ。だから素面のときも女装してて。アタシそんな環境で育つたから男相手も女相手も抵抗ないんよ。あ。でも女のときは男がいいやね。男のときは女も悪くないけど…」

妙に色っぽい流し目をする。

ほとんどの目が酒井に集まる。彼は「知らない」と首を必死になつて横に振る。

その間に隙を突かれて竹葉も唇を奪われた。
どうやらこの時点では女子は対象外らしい。そして当人たちも完全に傍観者である。

相撲で言うなら砂被りという状態で食い入るように見ている。

実際の「腐つていい女子」はリアルな男同士の交際は恐がるようだが、この場合きららが女の姿なので普通にラブシーンであった。そのため「男同士」の実感が乏しく「見世物」状態だった。
だがそうは行かないのは唇を狙われている男たち。

酒井自身も初日にはやらかしているが今度は被害者になりかけている。

（そ、そうだ）

酒井はこの危機を乗り切るべく烏龍茶のコップをカラにしてビールをぐいっとあおった。

「さーさー。酒井さん。次はあなたの番やね」

本当に男好きらしく色っぽく迫るきらら。酒井は酔いが回るのを

待っていた。そして酔つたのを実感した。

「これでも…出来るか？」

赤い顔の酒井が言うと彼の足元から煙が上がる。

「な、なんね？」

自分と父親だけと思っていた現象を東京で引き起こす輩がいる。それで充分驚けた。

煙が晴れるとやはりそこには美女がいた。

とにかく立つ胸元。そして「O」の私服の様な服装。

「ア、あんた。アタシと同じ？」

「はーい。どうやら親戚みたいでーす」

生真面目な男のときは打つて変わつて軽い乗りの真澄。可愛らしい声で言つ。

「それじゃあんたの父親ってウチの父ちゃんの兄弟？ そういうや酒井いうとつたけどそんな珍しい名前じゃないしまさかと思つたら」「親戚なのか？ しかし酒井の一族の呪いは男にだけかかるんだろう。苗字が違うなら… 婿養子か？」

「そうたい。ウチの父ちゃんは母ちゃんに婿入りしたとよ。酒井は旧姓で」

「もしかしてお母さんつて」

「うん。体は女だけど男みたいにしてるたい」

つまり逆転夫婦だつた。

「そのせいがあたしもそんなに男だ女だと拘らなくて。初体験も二十歳の時に大学のイケメン相手やつたし… きやつ」

可愛らしく頬を染めるきらり。照れて頬を押さえる。

菊水。竹葉はいわゆるどん引き。さすがの女子一人もファイクションというかファンタジーでない「これ」は恐いらしく表情が硬い。

しかし「筋金入り」の桜子は違つた。

「ふつ。甘いわね。女の肉体で男を求めるのではただの肉欲。本当の愛は例え同性でも相手を求めるところにあるわ」

やたらえらそうに講釈する。

「だからあたしはノーマルやつて。今は女だから相手は男がいいんよ。言うなればバイやね」

(それじゃ男の時にスルーされたあたしたちの立場は?)

さわやかに傷つけられた〇＿一人の女のプライド。

そちらには田もくれずきらはは真澄に脣でなくて口ッ音を差し出す。

「まさか転勤先で親戚にあえるとは思わなかつたわ。乾杯しよ」

脣を守るために既に女性化している。今更呑むのを躊躇う理由もない。

そして酔つて女性化したためか性格も軽めに変貌した真澄は軽やかに

「かんぱーい」とグラスを合わせるのであつた。

「そりゃ。きらりさんのパパ。お爺ちゃんに勘当されてたのね」「すっかり女同士の関係になつているきらりと真澄。

ビールから始まりチョーハイ。今はロックの焼酎。そのグラスを赤ちゃんのように可愛らしく持つていた。

度数がどんどん強くなる典型的な悪酔いパターンだつた。

他の面々もセクハラ魔女一人で相殺されたことで安心して飲んでいた。

「そちらしいわ。あたしが十歳の時。だから母ちゃんの故郷の福岡に越して」

「あー。それで博多弁がちょっと」

「おかしいやろ? でも博多の男は気がいいから誰もそげなことでバカになんかせんたい。まあベッドの中によくからかわれはするけど

「ベッドって…あの…男の人とそんな関係つて凄い気が」

本来は男であることを考えると当然の発言。

「なにゆうてんの? せつかく女にもなれるんよ。楽しまなくちゃもつたないじゃない」

(「ハーフのはダメポジティブといわんか？」)

ツツ「ハミを入れたいところだがまた自分に矛先が向いてはたまらんので沈黙の菊水。

そんな胸の内を知つてか知らずかきらりはますます饒舌になる。

酔うとテンションが上がるタイプだ。

「あんたそんなに綺麗でおっぱいも立派なんやから男も選り取りみどりやろ。愛してもらひんさい。次の日には男に戻つてるから妊娠もせんよ。ただ病氣もらつたらあかんから「ハムはいるけど」

「やつぱり……気持ちいいんですか？」

興味津々の真澄。この時点では完全に身も心も女である。しかも血筋らしく「積極的」になる傾向がある。

女としての「その感触」に興味を隠しきれない。

頬が赤いのは酔いか。羞恥か。

そんな真澄を優しい目で見ていくきらり。表情にあつた穏やかな口調で言つ。

「愛されるのはとてもいいもんよ」

「そうですか。どこかにいい男の人がある」

物干しそうな目を同僚の男子社員に向ける。硬直する面々だが「酒井。まあ飲め。女は呑んだ方が（快感が増して）いいらしいぞ」「え。なんですか？」

半信半疑の目を向ける。

「山崎を見る。飲んで気持ちよくなるからあれだけいえるんだろう」

「ああ。なるほど」

そういう風に言われると敬遠していた酒が急に大事なものに思えてきた。

「わかりました。それならもうと飲みます」

既に酔つてて正常な判断が出来なくなつていふこと。そして「色欲」が招いた結果として自ら飲み始めた。

「おーっ。いい飲みっぷりやね。女一人。とことんまで飲もうか

「ちょっとお。あたしも混ぜなさいよ」

「こちらは純正女子である桜子が乱入する。

どうやら貴腐人としてよりのんだくれプリンセスとしての方が上回った。

（ふう。助かつた）

これはまた迫つてこられないための男子社員たちの企みだった。

単純に酔い潰そうと。

普通は女性を酔い潰して「あーんなことやーんなこと」をするのが定番だが、逆に身を守るためと zwar いうから面白い。

桜子。そしてきらりに釣られて真澄も限界以上に飲んでしまった。結局まともに歩けないほどになつたため、またもや桜子の部屋で世話になることに。

「しようがないわねえ。ちょっと。酒井君の荷物はどう?」

後輩の口に尋ねるが逆に一人は見知らぬ女物のバッグを差し出してきた。

「吉野先輩。これ先輩ですか？」

「……あたしこんなの持つてないわよ。あんたたちじや?」

二人も首を振る。仕方ないので持ち主を特定させるべくバッグをあけると女性物のバッグに似つかわしくない書類とか男性的デザインの手帳やサイフが出てきた。

「酒井君のみたいね?」

手帳に挟まっているクレジットカードの名義から判断した。

「本当に便利よね。本人が女になると身の回りのものまで変わるなんて」

その場は誰も気がつかなかつた。多少なりともアルコールが回つていて正常に物を考えられなかつたのかもしれない。

酒井が変身した時にそのバッグに触れていなかつたことを。

なんとか真澄を連れて帰つた桜子は真澄をソファに寝かせる。その際も真澄はうなされて「もう飲みたくない」とつぶやいてい

た。

「そんなの迎え酒で呑まるわよ」
桜子としたらひとり言の感覚での返答だったが、しつかり真澄の耳に届いていた。

酔いで苦しみつつ真澄は「もう要らない。酒を勧めないで」と頭の中で繰り返していた。

そして「酒を勧められないためにね」と考えがめぐっていた。

翌朝。

ひどい喉の渇きと頭痛で真澄は最悪の目覚めをした。

「おはよ。お姫さま」

けりつとした桜子がちょっとぴり皮肉を込めて呼びかける。

「…吉野さん…俺また…」

かすれる声で尋ねる。可愛い声もこれでは台無しであるが、意識だけは既に男に戻っている。拘りそうになかった。

「はいはい。酒のミスなんて忘れなさい。ほー。お水」

透明な液体の入るコップを渡される。

まだ苦しい真澄は何も考えずにその液体をあおって

「ぐえほぐえほぐえほ」

激しく咽た。

「目が醒めた? 一日酔いなんて迎え酒で治まるわよ

安物の日本酒だったのだ。

そのせいからにひどい酔いに見舞われる。

そして煙が出て新たなる変身。

ここまで桜子の予想の範疇。

しかしその姿を見て彼女は仰天した。

時間が経ち、始業時間に。

男子のほとんどが前夜の酒で苦しそうだが山崎はなんともない。

「……お前……酒強いな……うっふ

竹葉が言いかけてやめた。胃液が逆流してくる感覚がそうさせた。余談だが菊水の方は呑みすぎて下痢を起こしてトイレに駆け込んで不在だった。

「ええ。博多じゃバイトでホステスもしてましたからね。密の相手で飲むうちに鍛えられたんですよ」

既に男の姿に戻っている。

「けど従兄弟は違つよつですね。のんびり仕事に支障が出ちゃまづいな」

酒井が従兄弟と覚えている。ちゃんと記憶もある。

逆に言えば女として男どもにキスしたのも覚えていいはずだが、それに対しても平然としている。

「おはよひ〜わこます」

妙に沈んだトーンの桜子の挨拶。

「吉野君。遅かつたな……その子は？」

桜子は童女を連れてきていた。

セミロングをツインテールに。いわゆるポンポンで分けている。黄色いワンピース。見た目は6~7歳。真っ赤なランドセルをしそつている。

「あやーつ。可愛い」

その愛らしさに宇良かすみが黄色い声を上げる。

「お嬢ちゃん。お名前は？」

澤野いづみもしゃがんで童女の視線にあわせて尋ねる。

「さかい ますみです」

小さな子供らしい大きな声。やや舌足らずな口調で答える。

「はい？」

「さかいますみです。みなさん。おはよひ〜わこます」

まさに小学校低学年のように元気に挨拶をする。

「えーっつつ

さすがの課長もここでは驚いた。

「吉野さん吉野さん。本当に酒井さんなんですか？」

「本当よ。あたしが迎え酒で飲ませたらこの姿に」
(お前のせいかよ!)

全員がそう突っ込みかけていた。

「しかしながらってこんな姿に?」

一同が同じ体質の山崎に回答を求めて視線を送る。

「いや…僕もこんなのは。ただ彼はかなり限界超えてましたからね。
それで何か超越してしまったのかも」

「そうねえ。何度も『飲みたくない』とうなされて」

「つまり…もう限界超えたのにさらに飲んで」

「飲まされない姿。未成年になつたと?」

仮説が出来上がつた。

「それにしてもここまで若返つたのはなんでだ?」

「そりやこんな子供に飲ませるバカはいませんし。防衛本能みたい

なもんじやないすか?」

竹葉の疑問に菊水が推論を述べる。

「もう。そんな難しい話はあとあと」

いづみが真澄を連れて行く。

「酒井さん… 真澄ちゃん」

同僚で年上の男性に呼びかける口調だったが、小さな女の子相手のそれに改める。

「お姉ちゃんたちとお写真を撮らない?」

「いいよ

何の意味があるかといわれれば遊園地でマスクシートと記念写真を
とするような感覚であるつ。

代わる代わるケータイで収まっていたが

「はいはい。あたしが後でデータ送つてあげるから

桜子が本格的なデジカメを取り出して撮りだした。しかも三脚まで使っている。

「……課長。いいんですか？」

見かねて竹葉が進言を試みるが

「ああいう体質はおもちゃになる運命なんだ。たぶん酔いが醒めれば終わるから放つておけ」

達観したこの一言で言えずじまい。

見た目と人格は小学一年女児だが、頭の中身は成人のままでいる。つまり仕事はこなしていた。

ただし椅子を目一杯高くしても机に届かず。仕方ないので隣の応接室の机をデスク代わりにしていた。椅子に使っていたクッションを座布団代わりにして正座して可愛らしく仕事を進める。

逆に仕事にならない〇したち。

真澄自身は妨害行為を働いてないが、その愛らしい姿にめろめろで何かと覗きに来るからだ。

「真澄ちゃん。書類出来たかな？」

菊水が取りに来た。

「はい。出来ました」

まるつきり小学生ののりで書類を差し出す。

「そうかあ。いい子だねえ」

中身が酒井と知りつつもこの姿で可愛い態度では思わず頭をなでても無理はない。

真澄本人は照れて笑っているが

「菊水のお兄ちゃん」

「なんだい？」

「大好き。大きくなつたら真澄がお嫁さんになつてあげる」

「はは…そりやどーも」

例え子供の姿でも男に積極的な「魔性」は健在か。そう判断した。

一時、小学生の真澄が中学生になつた。

身長が伸び、胸もわざやかに膨らみ、着ているものも夏用の半そでセーラー服に変わつた。

「酒井。その姿はまだ…」

「あ？ 何か文句あんのか？ おっさん」

「お、オッサン？ 27だぞ。俺は」

菊水がむきになる。

「二十歳越えてたらオッサンオバハンだよ。その年になつてもこんな場所で机にしがみついてるたゞ愁傷様だな」「どうやら反抗期らしい。表情も言葉もきつい。

「お…お前…わつあは『お嫁さんになんて』とか可愛っこいことついたのに」

「ああ？ ガキのこりの話しだろ」

今だつてガキだろ。全員が心中で突つ込む。

「見てる。あたしはこんなところじやおわらねえ。いつかは世界に出てやる」

具体的に言つてないがどうやら芸能関係らしい。瞳がきらめいている。自分が特別な存在と根拠もなく信じてこる。(中一病つて男だけかと思つてましたよ)

(本来は男の子だからじゃない?)

今度はかすみと桜子でひそひそばなし。

四時、そりに変身。ブレザーブル。身長はそれほどではないが胸はだいぶ大きくなる。

「どうやら高校生くらいか。酔いが醒めるにつれて元に戻る…ところの変だが大人に近づいているらしいな」

「でも高校生ともなると結構色気が出ますね」確かに肌の輝きも段違つた。

「いいなあ。あたしたちもあんなところがあつたんだよね」

少し前に思いを馳せるO-L一人。

「あたしはもう少し前になるけどね」

ややひがんだ感じの桜子。

「ああっ。そんなつもりじゃ」

「ふふつ。くくくく……キヤハハハハハ」

突然明るく弾けた笑い声が。女子高生の真澄だ。

「やだあーっ。もうなに。会社で漫才しないでくださいよー。やだもう。お腹よじれる」

「あー。箸が転げてもおかしい年頃か。上の娘がそうだったなあ」「つぶやく一村課長。ちなみに厳密には娘は一人しかいないのだが、現状では三人娘に近い家庭である。

「酒井。笑つてないで仕事しろ」

サブリーダー。竹葉が引き締めるべく怒鳴りつける。

「やだ。怒っちゃいやですよ。お・じ・わ・ま」

「おじさまー?」

例え女子とは「えど」「おっさん」「おじさん」といわれるどむかつくが「おじさま」ならちょっとと言われてみたい。そんな男心だった。

だが我に帰る。

「大人をからかうな」「はあーーい」

可愛らしく舌を出す。

残業。緊急性はなかつたが、全員真澄の変転を見届けたくて居残つていた。

その合間にちよつと一息。

いすみ。かすみに真澄が加わり男性アイドルの話しへハイテンションに繰り広げていた。

「そろそろじゃないか」

ポン。煙が上がり「いつもの」O-L姿になる。

「おー」

「女子大生は飛んだね」

「大学生じゃコンパとかで飲むから無意味なんでしょ。それで一足飛びにあの姿になつたよつね」「つまりだいぶ酔いが醒めてきていた。

「課長。チェック願います」

落ち着いた事務的な口調で提出する。

「おー」

「やつとこにまで戻つたか」

周辺はほとんど仕事自体は片付いて真澄の変化を見届けていただけ。

「はい?」

首を傾げる大人の真澄。

「まだ意識は女のままみたいね」

「明日が楽しみですねえ」

翌日。やつと酔いが抜けて男に戻つた酒井。

(あーいて。頭痛いぞ。また何かやつちまつたのか)

このころにはもう女として暴走した程度では動じなくなつていた。しかし頭が冴えるにつれて脳裏に蘇る「若さゆえの過ち」

酒井は自分でも頬が熱くなるのが実感できた。布団にもぐりこむ。(こ)これはきつい。なんで「女の子」としての記憶まで出来るんだ?

誰とも顔を合わしたくなかったが、根が真面目な酒井は当日に休むなどということが出来なかつた。

かなり気が進まない状態で出社する。そして

「おはよう。真澄ちゃん。今日は挨拶しないの」「ケータイの待ち受けで童女バージョンを見せられる。

「酒井君。女優になるつもりでも枕営業はダメよ」

桜子にはこれを揶揄され

「さ、酒井。もう一度変身して『おじさま』と言ってくれないか？」

真面目な竹葉にまで言われる始末。

覚悟してきたつもりだったが赤くなったり青くなったり。

その肩を叩く女の手。

「山崎……つて何でいきなりホステスに？」

「酔っ払つてしたことなんて仕方ないことやね。飲んで忘れるが一

番よ」

ちゃつかり「中州のホステス」になつていきたきらりの差し出すグラス酒。

羞恥から逃れるべく酒井はそれをぐいっとあおるのであった。

こうして酒井真澄は「酔っ払つて女の子らしく振舞つた記憶」にくわえ「既に成人男子なのに未成年女子の恥が次々と追加される」という不幸体質に開眼した。

そして周辺でこれに同情するものもなく、むしろ面白がっていた。不幸の度合いは増す一方であった。

飲まなきややつてられないほどに。

四杯目 吞まれたら小恋?

土曜日。けだるい毎下がりも過ぎ、それそろ夏と言つ季節でも太陽が西に傾くころ。

本来なら休みであるのだが吉野桜子。山崎きらら。そして酒井真澄の三名は休日出勤で仕事をしていた。

「よーし。終了」

25歳のO。桜子の声が明るく響く。

「いつも終わった」

同じ歳の男性社員。酒井真澄も答える。

「それじゃみんな完了だね」

もう一人の男性社員。どことなく酒井に似ている山崎きらら。彼だけは年がやや上。

「まつたく。』月曜にプレゼンやるから資料頼む』なんて簡単に言わないで欲しいわね」

肩を叩きながら桜子が言へ。O」と言つことで制服姿。「まあまあ。それよりどうかな。夕食には早いがこっちなら」きららは杯をある仕草をする。こちらはグレーのスーツ姿。ただし上着は椅子にかけてある。

六月下旬。そろそろ冷房の欲しいところ。

「いいわね。お疲れ様つてことで」

酒井。山崎両名はこの支社に来てまだ口が浅いがそれでも打ち解けていた。

それは山崎の仕草に現れている。

酒井真澄。山崎きららは男性。吉野桜子は女性だが色っぽい関係にはなかなかならない。

飲み友達になってしまっている。

もつとも酒井はもっぱら巻き込まれてである。

彼はある事情から成人式を五年前に終えた身でありながら酒を飲んでいなかつた。

「俺は勘弁してくれ。何度も同じ失敗をしていいんだ」

濃紺のスーツの酒井が渋面で言つ。その恋まわしき体质ゆえに。「あらあら。それじゃ一人で帰つてわびしくご飯。寂しいわね」からかつている。あるいは挑発するかのように桜子が言つ。

「そんなのはいつもだよ。あんたらにつきあつと大変なのは学習している」

「まあまあ。酒井君。君は」「飯を食べるということはどうだい? それとも従兄弟の僕の言つことでも聞いてもらえないかな?」「う……」

そう。互いにこの支社で出会つまでは知らなかつたがこの両名は従兄弟であり血縁関係である。

そしてそれゆえの共通することがある。

それを酒井は忌み嫌い、山崎は楽しんでいた。

「そーよー。それに一人下戸がいると後は安心して飲めるしね」「ブレー キ役かよ?」

と突っ込んだもののふと考える酒井。

(だけど確かにこいつらだけだと何しでかすかわからん。かかわりたくないが)

むちやくちやながらも楽しそうに食べて呑む二人と、一人でご飯の自分。

それをイメージしてしまい寂しさが募る。

「わかつたよ。ついでいってやる。だがあまり無茶するんじゃないぞ」

「さすがは僕の従兄弟。話が早い」

「それじゃ片付けに掛かりましょ」

会社を出た酒井と山崎はスーツ姿のままだが、制服姿だった桜子

は通勤用の私服である。

休日だが出勤と言うことでクリーム色のレディースーツ。ただ暑くなつてきたこともありストッキングはない。ブラウスも薄いピンクと平日は着ないようなものだ。

「さあ。いくわよ」

本来なら休みのところを拘束していた仕事から解放され、その拘束されていた鬱憤を晴らすべく彼女は力強く進んで行く。むしろ酒が彼女を呼んでいる?

ついていく酒井は苦笑するだけであった。

午後五時。

たいていの飲み屋の開店時間だ。

桜子の先導で一同は古ぼけた居酒屋に来た。三人は店の看板を見上げる。

「『きりやま』……変な屋号だな」

飲み屋には向いてないのではないか? そう酒井は思つ。

「単純に主の名前じゃないのかな」

従兄弟が続く。

「名前なんてどうでもいいでしょ。ここは着もお酒もいいのがそろつているのよ。いつかつれてこようと思つていたの」

桜子が扉を開け明るく挨拶して中に入る。ここの中とは懇意のようだ。

山崎。そして酒井も暖簾をぐぐる。

テーブル席に案内される三人。若い男性店員が注文を取りに行く。

「二人はなにを飲む?」

「僕は明鏡止水を口々で」

山崎の言つるのは焼酎の銘柄である。

念のため言つが呑むとスーパー モードに突入するわけではない。

「俺はウーロン茶でいいよ」

「『ウーロン』ね。わかつたわ」

何か含む笑顔の桜子。店員をスルーして明るい声でカウンターの主に注文をする。

「きりやま隊長…」めん。かんじゅつた。大将。明鏡止水をロック。それと『ウーロン』。あたしはいつも、「なにつ…?」

壮年の店主は振り返り尋ね返す。

「だ・か・らあ。彼は『ウーロン』ね」

疑問点が解消されたらしく主は仕事に掛かる。

それぞれの飲み物が運ばれてくる。

山崎の前には透明な液体に氷の入ったグラス。桜子の前には一升瓶まる」と。

「豪快だね」

山崎も驚いている。

「いちいち注文する面倒なくていいでしょ」

笑顔で答える桜子。

「女は肝臓が小さくて男より酒に弱いときいた覚えがあるが、例外と言つ物はどこにでもあるものだな」

ジョッキに氷とともに入れられた「ウーロン」を手に酒井が言つ。

「それじゃ乾杯しましょ」

桜子は手酌で中身をコップに注ぎ込む。

飲めない…正確には「飲みたくない」酒井はともかく、両名ともに「とりあえずのビール」を飛ばしていきなりこれだ。

「おしごとおつかれさまぁ」

「ついわれたら乾杯に応じるしかない。

酒井もグラスを鳴らし、そして飲み物を飲む。

(なんかえぐい味だ。まあウーロン茶つてそんなものか) そう言つ意識があり『味の違い』に気がつかなかつた。

山崎が最初の一一杯を空ける前に酒井に異変が起きた。

足元から煙が上がり仕事帰りの〇〇と言う感じの美女に変貌した。長い髪。イヤでも目に付く大きな胸。化粧した顔は酔いのせいで目元がとろんとしていた。

「な…なんれ？ あたしあ酒飲んでないのに」

「ふつふつふ。真澄君。君はウーロン茶を飲んでいたと思っていたようだが、世の中にはウーロンハイと言うものがあるんだよ」まるで探偵物の主人公のように「種あかし」をする山崎。もつとも仕込んだのは桜子だが。

真澄が口にしたのはウーロンハイ。チューハイの一種でウーロン茶で割る。

ちなみに単に『ウーロン』と注文したらアルコール飲料。

『ウーロン茶』ならお茶がくる。

だから店長は確認のために聞き返した。

酒井はその辺りを理解していなかつたので引っかかつたのだ。

「そろそろ僕も…ひつく

言つなり山崎も美女へと変身した。

一ちらはまるでホステスである。金に近い茶髪。ボディライン浮き出しのワンピース。ハイヒール。そして「夜の蝶」らしい厚化粧。度数が強いにも関わらず山崎の変身が遅かつたのは単に酒に強いから。

酒井真澄。山崎きららの先祖は普段はマジメだが酒癖の悪い男だつた。

酔つた勢いで村娘に対して今で言つ「セクハラ」をしていた。その結果として娘達の「のろい」で酔うと女になる体質に。「身をもつて女の思いを知れ」と言つことだった。

そしてそれは末代まで続く呪い。

つまり子孫の男子達も酔うと女になる体質なのである。

ついでに言うとセクハラぐせも受け継がれているらしく、やたら淫靡になる傾向がある。

素面だとマジメな酒井とて例外ではない。

これはまるで酒に酔つてのそれとよく似ていた。
酒に酔つとリミットブレイクではなくリミットが外れてしまう。
たがが外れてしまうのだ。

真澄。さらりの場合には性転換まで伴う。

目を丸くして驚いている若い男性店員。

「たいちょ…大将。見ましたか？ 今のお客さん達。男が女に」「
そんなバカな話があるか。北登」
「本當です。僕はこの日で見たんです」
「いいから仕事しろ」

大将はなじみの桜子の印象だけ残っていたのだ。まして同性相手
に興味がなく、それで覚えなかつたのだ。

「もう。だますなんてひどいじゃないですかあ」
やたらかわいらしい声で講義する真澄。

あまりに可愛くて「ほんこつ」と表現したくなるタイプの声だ。
動物の尻尾にむやみやたらに興味を示しそうだ。

「ええやん。これで女三人。気楽に飲めるタイ」

きららは生まれ自体は東京なのだが十歳から大学卒業。そして就職して現在の支社にくるまで福岡で過ごしていた。

それゆえか女性化すると博多弁が出る。
生糀の博多つ娘じやないからか？ あるいは酔うからか怪しげな
方言だ。

きららはこの体质を父親を見て知っていた。
そして性転換を楽しんでいる。

実の所ベッドの相手は男の方が多い。

対する酒井…真澄はやはり本郷支社に春からの移動。

その歓迎会で生まれて初めて酒を飲み、そして初めて変身した。当然ながら部署の人間は驚くが妙に冷静な上司の計らいもあり、受け入れられていた。

…と、言つよりも厳密に言つと桜子の「おもむかや」になつっていた。酔つと淫乱になるのは同じだがこちらはやや「清純派」。ずばり言つと「カマトト」「ぶりっ子」といえるタイプ。女に言いがかりをつけられるタイプの女になる。

「そうそう。明日も休み。女三人でのみあかしましょー」「吉野桜子は一人と違ひ生糀の女性である。

だが明らかに一番ひどい「のんだくれ」は彼女である。高校時代は文武両道の生徒会長を務めていたような声だ。

現在は合氣道師範をするのんだくれプリンセスと言つ感じである。

「あたしそんなに飲めないのにーっ」「

ジョッキを両手でもつて可愛い声で叫ぶ真澄。

とはいえたこの二人にかなうはずがない。

既に変身してしまったのだ。その点だけならもう構わない。だから結局は押し切られて飲み始めた。

「ほら。真澄ちゃん。これ美味しいわよ」「

「とみの…ほうざん？ お酒ですか？」

「鹿児島の焼酎よ」

きららからボトルを渡される。

ラベルで確認。確かに鹿児島産だ。

「へえー。なんだか美味しそうですね」
産地のイメージに左右された。

「おじさま。コップください」

場違いな「おじさま」と言つ呼びかけに照れる主。

真澄のイメージでジース用とでも思つたか、カーリー・ヘアの丸メガネの田つきのきつい女性キャラの描かれたタンブラーを運ばせた。

「それじゃ

真澄はまるでミネラルウォーターでも注ぐように半分まで焼酎をいれる。

(うわあ)

美人ばかりのテーブルに他のテーブルの男性客がなんとなく視線を寄せていて、そしてこの様子に心中で声をあげていた。

真澄は注いだそれを氷もお湯もなくそのまま口にする。その瞬間、激しくむせた。当然の結果である。

「無茶よおー」

といいつつ「面白そう」と静観していたきらり。

桜子に至ってはビデオカメラで撮影までしている。

「さ、桜子さん。いつもそんなの持ち歩いてるんですか?」

落ち着いた真澄が尋ねる。

「だつてあなた達といたら面白いことばかり。撮影しない手はないわよおー」

「見世物じゃないですか？」

年齢的には真澄と桜子は同じなのだが、どういうわけか肉体に伴い精神も女性化した時は年下であるかのように振舞う。

「これも可愛く見られたい」「女心」と思われる。

「さあさあ。明日は休み。今日は飲むわよおー」

桜子のこの言葉。単なる乾杯の音頭ではないのが後にわかる。

五時から初めて悠に四時間。午後九時を回つたところ。
この時間から来る場合、既によそで飲んできているケースも多々ある。

それだけに多少のことでは動じない。

しかし美女三人が甲高い声で下ネタを展開していくのにはさすが

に驚いていた。

正確には二人。真澄はおとなしくちびちびと飲んでいる。ノンアルコールを頼むと二人が勝手にキャンセルしてもつと強い酒を頼んでしまう。

「大将。アブサン頂戴」

そう桜子がオーダーした時は何故かやたらに長いバットがもつてこられたりしたが、とにかくもつと強い酒を飲まされるので比較的度数の低いものをちびちびとつまっている。

「だからあ。」
「うう。こうしたほうが気持ちえんよ」「うなりきらはゆでた特大ソーセージを口にくわえる。噛み千切らず噛め回している。

男性客はあまりの「攻撃」に逆に言葉を失っている。

「えー。そりゃあなたは知っているでしょうけど」もちろんきららの正体を知るゆえの桜子の発言だ。
彼女は体験のしようがない。

「……ところでそのときは男？ 女？」

「男にきまつとるたい」

「きやーっ」

黄色い声を上げる腐女子。

「あ。いうとくけど相手は女の子よ」
もちろんその時点できららは男だからなのだが、聞き耳立てていた他の客は仰天する。

(お…女同士でそんなことを?)

「なんで？ どうして男同士じゃないのよ」

桜子は筋金入りの「腐女子」だった。

基本的には一次元好きだが、この時点じゃ単なるバカ話のせいか三次元でも平気な桜子。

顔色が変わつてないもののしたたかに酔っ払つてもいるせいでもあろう。

別に女性が下ネタを口にしていけないわけではない。

ただ例えば男性であれ程度によつては引かれる。

ましてや女性となるとなおさらである。

この場合きららは本来男でわからなくはないが、相手を務めていたのは元から女性である桜子である。

真澄が赤いのは酔いのせいか羞恥のせいか。

「……きららさん。その…男の人ともその…」

頬を染めていいにくそうにしている姿が、先刻のきららの「ソーセージ」とは別の攻撃を男性客にヒットさせた。

(か…可愛い)

清純派に見えたせいで。

「なんね。あんたまだやつたんかいな」

上から田線のきらら。

「ど、どうせ私はおこひちやまですよーだ」

可愛い声で拗ねると余計可愛らしい。ただしもつと幼く見えるが。

「なんならここのお客さんに相手してもらつたりビツ?」「

きららのとんでもない提案にむせ返る男性客。

むしろ「ソーセージ」の件といいかかつて遊んでいる節がある。

「んー。それいいかも」

立ち上がり歩き出す。

実行に移す真澄もかなり酔つ払つている。

別テーブルにいるサラリーマンの一団。

スーツを椅子にかけ、ネクタイを緩めてラフな感じに。

やはり仕事を追えて翌日が休みで飲みに繰り出した。そんなところ。

そこにはすみがふらふらと歩み寄る。

ただ歩いているだけなら気にも留めないが明らかに「きららを田指しているので注目する。

ましてや巨体はともかく今は可愛いタイプの巨乳美女。

思わずちらちらと見てしまつような相手が向こうからやつてくる。

さらには一番手近な男性客。メガネの細身にしなだれ掛かる。

赤く染まつた頬。潤み瞳。上田遣い。高めのやや口リータ氣味な

アニメ声で

「おにいさん。私とおつきあいしてくれませんかあ」

「こんなことを言われたらたまらない」

だがさすがにいきなり「食こつべ」とはなく巨惑つぱかり。

「えつ？ 今なんて？」

当然の反応。そして予想の斜め上のリアクション。

「もう。恥ずかしいんだから。一度も言わせないでください」

言いながらメガネのサラリーマンのワイスシャツのボタンをその細指で外して行く。

「ちょ、ちょつと」

撻破りの逆レイプか？ 身の危険を男の方が感じた。

「お密さん。やめてください」

店員が止めに入つた。

「あん。もう」

文句を言つ真澄だが店員の顔を見る。

「あら。あなたも結構可愛いかも。お願い。私を女にしてください。まだ経験がないんです」

その場で口に含んでいた全員が一斉に吹き出した。

それももつともだ。

「吉野さん。つれて帰つてくれる？」

どうどう大将に追い出された。他の客の迷惑と言つことだ。

「あやははは。いい物見せてもらつたわあ。それじゃ河岸を変えましょうか」

メストラ二匹が出ていつた後で誰かがつぶやく。

「痴女がいた……」と。

まだ十時。宵の口。次に三人が訪れたのはきらりの案内した店だ。

「ここって……」

店の看板に男の写真がでかでかとはつてある。

タイプは違えど美男子ばかりだ。

「そ。ホストクラブやね。女ならではの遊び」

「いいわね。一度来て見たかったのよね」

一番先導しそうな桜子だが、飲んでいるうちに「行こう」といつ
その意識をなくしてしまってまだ来たことがなかつた。

当然ながら本来は男の真澄も初めて。

その「初めて」がもろに現れた。

体育会系のホストに愛想を言われてメロメロになつてゐる真澄。

「可愛いね。君」

もちろん女性客をもてなすのが仕事の彼らである。容姿を誉める
のは当然。

真に受けないものの悪い氣はしない……それは最初から女性になつた真澄はその言
葉を真に受けた。

「ほんとう?」
「ほんとう?」

やたらに潤む瞳で上田遣いで見上げる。

プロであるホストが一瞬だがどきりとさせられた。

(やべ。この客マジで可愛い。まじいな)

傍目に敬遠にかかつっていたが真澄本人はその「酒癖」もありど
んどんと迫る。

また追い出されではたまらない。桜子がさすがに止める。

「はいはーい。さか…真澄い。飲みましょ。これなんて美味しいわ

よお

「で、でもいい男が」

頬の赤みは酔いか恋心か。とりあえず「本来は男なのに女として

色々やらかして恥入つている」と咲の口には現時点では女心ゆえにないが。

「まあまあ。まずは景気付けに一杯やりましょ」

「えーっ。やつきのお店でみんなに飲んだのに」

「この店じや飲まないとホストが相手してくれないわよ」

あながち嘘でもない。

完全に「イケメン」に田代がくらんでいる真澄はしぶしぶアルコールを口にした。そして

「やだこれ！？ 美味しい」

「でしょう。とっても高いシャンパンよ」

「これなら私でも飲めます。あーん。美味しい」

一瞬で関心を切り替えた辺り桜子の酔っ払いのあしらい方はかなりのものだった。

ちなみに真澄達をおどりにしきりには可愛いタイプのホストを押し倒して速攻で唇を奪っていた。

まったく躊躇いはなし。同性相手といついつ意識はない。完全に自意識が「女」である。

ホストクラブを出た時は三時。

飲み口のよさで深酒になつて来た真澄はかなり危なつかしい状態だ。

「まったく。あのくらいで情けないわね」

桜子が責めるがこの場合で普通なら『飲みすぎよ』と責めるところだが正反対である。

「はいはーい。うちは飲み足りないっぢゃ」

どこかの鬼娘を彷彿とさせる言葉遣いできらりが言つ。

ホストにかまけて彼女としてはほど飲んでないのである。

「うーん。でも今からじや半端よね。それじゃ始発まで」

桜子の先導でコンビニエンスストアに。

そこでさまざまなかつた種類のアルコール飲料とつまみを買い込んだ。手近な公園のベンチで酒盛りを始める女二人。真澄はダウン中。とうとう朝日を拝む羽目に。

そのころには全員ダウンしていた。女三人で仲良くベンチで寝ていた。

朝。六時。とある集合住宅の一室。

野球帽をかぶった少年がそっと出てきた。ジャージ姿である。十歳の彼は細身の少年。「ごく普通の子供だ。髪は短め。スポーツマンと言つイメージ。

どこか未来ある少年とは思えない落ち込んだ表情である。しかしそれを振り払うように首を振り、そして自らを鼓舞するよう走りながら降りていった。

彼・武本雅彦の習慣なのか家人は誰もそれを不審には思わない。

それから三十分。

徹夜で飲んでいた桜子ときららはさすがに酔い潰れてベンチで寝ていた。通りに面したベンチなのが幸いしてか暴漢などにも襲われずにすんでいた。

真澄の場合は元々強くないのに飲みすぎて既に「一日酔い状態。脱水状態から強烈な喉の渴きを覚えて目が覚めた。

アルコールの残る頭は彼女を未だ女性としての精神状態にとどめていた。

「…………お水」

公園だから水飲み場はある。だが桜子の傍らにカラフルな缶飲料が。

ウーロンハイを知らなかつた真澄である。缶チューハイをジュースと勘違いするのも不思議ではない。

彼女は何の疑問も持たずに飲み口を開け、そして中身を一気に飲

み干した。

「やだこれ……」

飲み終わつてからアルコール飲料と気がついた。そして足元から煙が上がる。

野球帽の少年。雅彦は公園から煙が上がつたのを見て氣を引かけた。

普段はジョギングのコースにはいつていない公園に入り込む。成人女性一人が酔い潰れて寝ていた。それだけならわからなくはないが、何故か小学校低学年くらいの女の子がいる。

ツインテール…と言うよりもっと短いキャンディーヘア。

ワンピースが愛らしさを醸し出す。

そして何より人懐こい笑顔だった。

明らかに初対面である少年に笑顔を振りまい。

少年・雅彦もつられて笑美を返す。そしてごまかすように質問をする。

「君のお姉さん達？」

少年はまず単純に考えた。この女の子はだらしない大人一人の世話をしていたのでなかろうかと。

「ううん。お友達」

雅彦は混乱した。

彼の少ない人生経験でも酔い潰れた一人が二十台と言つのは見当がつく。

一方どう見ても自分より年下の女の子。それが友人関係？

「僕、武本雅彦。君は？」

しつけがよいのか相手の名前を尋ねる前に名乗る少年。その幼女は元気よく返答した。

「さかい ますみです」

先祖にかけられた呪いゆえに酒に酔うと女性化する酒井一族の男

子。

その中でも変り種だつたか。真澄は「もう飲めない」といひどさ

ろからせらうに飲むと年齢退行を起つ。

推測では「これ以上、飲まされない姿」と言ひ「」と「子供」にな

なるのではないかと思われていた。

女性化すると酔いも手伝い精神的にも完全に女性化する酒井一族の男子。

真澄の場合にはさらに年齢にあつた思考になる。

平たく言つと現在の真澄は7歳の少女そのものである。

「おにいちゃん。なにしてんの?」

まだ早朝ラジオ体操の時期ではない。

「トレーニング。でも…やつても仕方ないかな

「なんで?」

無邪気に尋ねる童女。少年はつい「縦人に言つても仕方ない」と話を。

誰かに聞いてほしかつたのかもしない。

「この前の試合でエラーして……監督にレギュラーから外すと言わ
れたんだ」

少年野球の一塁手である彼は前回の試合でタイムリー・エラーをしてしまつた。

そしてセカンドのポジションを争つライバルが次の試合のスタメンとなつた。

それで落ち込んでいたのだ。

「あいつ上手いからなあ。僕はもうレギュラーに戻れないかも知れ
ないし……」

「野球、やめようかな」と言いかけてたら真澄が抱きついてきた。

「わっ。真澄ちゃん」

「お兄ちゃん……かわいそつ」

その感受性の強さで同情してしまい、思わず抱きしめて涙してし

またのだ。

「……困ったなあ」

以前にも慰められたこともあったが、まさかここまでしてくる相手がいるとは思わなかつた。

それも初対面で。

雅彦は困惑するがそれでもこの優しい少女の心遣いに暖かいものがこみ上げていた。

そして……それをこいつそり見ている一人のよいどれ女。

「目が覚めたら面白うことになつてたバイ」

田覚めてすぐに缶チューハイを口にするきりひ。彼女のは場合は女姿の維持も目的。

「持つてよかつたわあ」

桜子もさりげなくビデオカメラを回している。「ワープシーン」を余すところなく収めている。

「お兄ちゃん。元気出して」

涙の残る目で下から見上げる真澄。

まだ「色恋沙汰」には目覚めていない雅彦だがドキッとなつた。もしこれで目覚めたら「男相手」に田覚めしたことになるが知らぬが仏。

「そうだ。大きくなつたらますみがけつこんしてあげる。だからげんきだして」

「け、結婚！？」

いくら子供でも言つことが突拍子もなさずざる。

当然である。

童女の姿ゆえ忘れてしまうが、酒井真澄は絶賛酔つ払い中なのである。

酔つ払いの理屈にまともな理論など通用しない。

ベンチの一人にも聞こえる高い声での結婚宣言。

大声でキャーキャー言いたいのをこらえて静かに盛り上がるから
と桜子。

「確かに前の前もいつてなかつたかしら?」

「見境無しとはさすがあたしの親戚タイ」

「酒井君つて中年好みかと思つてたらあんな子供に。むしろショタ
だつたのね」

好き勝手にいつているが現状では言われても仕方ない。

「え……ええええ! ?」

人生経験の浅い少年でも「結婚」の重さは理解出来る。言葉ではなく感覚で。

そして反応は大人の男と同じ。たじろいだ。

「お兄ちゃん。目をつむつて」

かわいらしく言つ真澄。童女ゆえに「色氣」はないが「可愛さ」
ならある。

それにやられ、またたじろいで半ば思考が麻痺して言われたまま
に目を閉じる。

「しゃがんで」

このおかしな要求にも従つてしまふのは少年の素直さゆえか。
おかしな状況に不安になつていたらどじめとばかしに唇に柔らか
いものが押し付けられた。

(!?)

思わず目を開けると至近距離に真澄の顔。あわてて引き離す。

「なにするの?」

「えへへへ。お嫁さんになるならチューしてもいいんだよ

子供ゆえの短絡思考ではない。酔っ払いの「つながらない思考」
である。

ベンチのメストラーピはそろそろ寝たフリがきつくなってきた。
体勢もあるがあまりに真澄の行動が面白すぎた。

「もう一。かわいいな。ちっちゃな恋人。ほんとに嫁に行けばいいのに」

「酒井君つてあの年でもキス魔なんだ」

完全に野次馬ゆえに無責任な感想を述べていた。

そして新たなる展開。少年が声をあげて逃げ出した。

「根性なしやね。そんなんじゃ将来女を押し倒すこともできんとよ。あたしなんかこの前シャワー浴びてる最中にもう始められて」

「しょせん男はそつなよね。いざとなると逃げ出すし」

本当に好き勝手な「ガールズトーク」だった。

逃げられた真澄はしょぼんとしてベンチに戻つてくる。

きららと桜子は寝たふり。それを起こそうともせず真澄自身も眠つてしまつ。

男の子がいなくなつた事で緊張が解けたか眠気が戻つてきたようだ。

あるいは逃げられたことで不貞寝なのか？

とにかく可愛い寝息を立てて童女は眠り始めた。入れ替わりに桜子ときららが起きる。

「あたたた。体がバキバキいつてるバイ」「ほんと。でもいいもの見せてもらつたわあ」

桜子はビデオカメラを取り出す。次いで真澄を見る。「可愛い唇なのにもう男を知つているのね」

「……桜子さん。それはちょっと……」

雅彦は自宅に戻り朝食を摂つていた。食べながら公園での出来事を振り返っていた。

（びっくりして逃げてきちゃつたけど…悪いことしたのかな？）

優しい少年であった。

ほとんど通り魔にあつたようなものなのに相手のことを察じていた。

(ちつちやな子だったからきっとよくわかつなかつたんだ。どうしよう。謝つた方がいいのかな?)

そう考え出すとそちらに頷く。

彼は急いで食べるとまた出て行つた。

時刻は八時を回つたところ。

きらりの膝の上ですやすやすと眠つてゐる真澄。

見守るきらりもこつものけたましさが消え、優しい田をしてい
る。

「……母と娘みたいね。あんた達」

桜子の感想。実際は男どうしだが。

「うふふ。あたしが子供産んだらこんな感じのかなって思つてた
ばい。行為だけなら何度もしていいけど妊娠はしたことないし」

「してたらまずいでしょ!」

そんな会話をしていたら真澄が田を覚ました。

「おしつ」

「ああ。お手洗いはあつちやね」

「うん」

小さな体で走るさまは本物に可憐らしく。

入れ違いになるかのように雅彦が公園にきた。仰天するきらりと

桜子。

(な、何あの子がまた?)

(単に地元なんぢやない? 誰か探しているのかしら。まさか酒井

君?)

桜子の見た通り雅彦はあちこちを見ていた。その視線がトイレに向かつたとき、黒いセーラー服の少女が出てきた。

背中までのロングヘア。長めのスカート。そしてやたらにしきつこ
顔つき。

(あらあ？　トイレの中で少し戻つた見たいね)

(いっぽい寝とつたもんなあ)

そう。この少女は真澄が中学生になつた姿だ。

飲みすぎてしまつと防御のため飲まれない姿へと変貌する。

それが童女姿。

そして回復していくと少しづつ本来（？）の大人的女性姿に戻つて行く。

この中学生バージョンはその途中と言つわけだ。

そして本人が「中学生」に抱くイメージが「反抗的」だつたため、それがそのまま真澄に反映されてやさぐれていった。

(あのお姉さん。怖い。係わり合いになりたくないな)

雅彦少年の反応はもつともだ。彼はさりげなく視線をそらし、その場を去ろうとしていた。

「逃げてんじやねーぞ。ガキ」

童女の時と打つて変わつて攻撃的な口調だ。雅彦は震え上がる。

「そうやって逃げ回るのか？　エラーしたことから。レギュラー争いから逃げるのか？」

雅彦はぎょっとなつた。

なんでこんな見ず知らずの女子中学生がそんなことを知つているの？

よくみれば7歳の真澄と顔が似ているのはわかる。

しかし同一人物とは思うわけがない。

(真澄ちゃんのお姉さん？)

きわめて普通の回答を導き出した。

「だってあんなエラーしたら…もつ使つてもうえないよ」

半ばトラウマになりかけている。

「バツキヤロー。てめえそれでも男か」

まだ大人になりかけの「幼さの残る声」で怒鳴りつける。

思わず顔をしかめる雅彦。

あたりの人間は観て見ぬふりだ。

しかし見ぬふりどころか桜子はきつちりビデオカメラを回していた。

真澄はしゃがんで雅彦の目の高さに合わせる。

「男だつたら欲しいものは奪い取れ。こんな風になつ」「言つなり彼女は雅彦の唇に自分のそれを押し付ける。

逆に雅彦は「奪われた」のだ。

たつぱり一分は唇を重ねていた真澄がやつと開放する。

「どうだ。こんない女がキスしてやつたんだ。少しほ元気が出ただ

る」

いい笑顔だが完全に「ヤンキー」そのものの真澄。

対して一日に一度も見知らぬ少女達に唇を奪われた少年は青ざめる。

「わあああああ」

彼のしたことは「脱兎の」とく逃げることだけだった。

「ちつ。なんでー。根性なしが…見世物じゃねーぞつ」

野次馬を威嚇する真澄。見るなと言つのも無理な相談だが。

「あつ？ てんめー」

真澄がビデオカメラに氣がついた。怒りの形相で大きなストライドで歩み寄つてくる…が、足元から煙。

それが晴れるとブレザー姿の女子高生がいた。

「やだあ。桜子さんつたら。録つてたんですかあ。もう。恥ずかしい」

さらに一段階戻り女子高生になつた。

「この姿の時は17歳らしい。箸が転げてもおかしな年頃。ビデオカメラでとられていたことも、『恥ずかしい』で流してしまつた。

「可愛くとつてね」

桜子の構えるビデオカメラにピースサインまであるほどだ。
(よかつたあ。おとなしい娘になつて)

確かに攻撃的なところはない。だが本性は『淫乱娘』である。たまたま女だけだからでないがひとたび男が現れたら。

そう。まだ『男』と呼ぶのにためらいを覚えるよつな「少年」で

さえ彼女のターゲット。

「とりあえず帰りましょつか」

ベンチで寝ていればあちこち痛い。桜子の提案に賛同する一人。「ジュースもらつていいですか？」

「あ、それは」

ジュースでなく缶チューハイだ。返答を待たずにベンチにおいてある袋から取り出して飲みだした。

「いいの？」

「うーん……だいぶ戻つてきているし多少ならあの姿を維持するのにいいんぢやう?」

気分よく飲んでいふところを取りあげられるのは堪らない……これは酒飲みの気持ち。

それがわかつたのでほつといた。

おかげで真澄は女子高生姿を維持していた。

集合住宅。

「あらいけない。雅彦。お使いいつてきてー」

雅彦の母が駅前の店へお使いを頼んできた。

(駅前か。公園は通らないからあの怖いお姉さんいないよね)
一度もキスされて恐れていたが方角が違うので雅彦は了承した。

まさかのエインカウント。雅彦は真澄と三度あった。

ただし今度は女子高生姿。だから別人と認識した。

「あらあら。まあまあ。偶然ねえ。雅彦君」

「え？ どうして僕の名前を」

雅彦は猛烈に嫌な予感…それを言つなら「悪寒」がした。

お構い無しに女子高生の真澄は近寄る。

「元気出たみたいね。お姉さん。心配していたのよ」

まるで流れるように少年をその豊満な胸元に抱き寄せいる。

その感触に眠っていた「男」が目覚めたか。頬を染める雅彦。

「がんばる男の子好きよ。これはお姉さんから御褒美」

二口一口としながら顔を近寄せる。

少年はもうなにをされるか悟っている。

そして桜子はビデオカメラを回している。

またもや唇を奪われる雅彦。

「あ、あ、あ…」

彼の生涯において一日に三度。それも全て別の女に唇を奪われるなどこの日以外にはない。

もしそれが全て同一人物なのはまだしも「正体は男」と知つたら彼の何かが崩壊するのは想像に難くない。

赤くなったり青くなったり。

「うわああああんつ」

そしてリアクションも同じだった。雅彦は『痴女』から逃げ出した。

「まあ？ どうしたのでしよう」

「そりやあ…いくら小さくてもこうも立て続けになすがままにされたんじや男のプライドはずたずたやね」

「そうなの。男の子つて？」

「あんた達もほんとは男でしょ？ が。はいはい。帰つて寝なおすわよ。月曜は仕事なんだから」

「そうやね」

「はーい」

再び駅へと向かう。

「あ。その前にちょっと待つてくれる? 本屋さんで買い物
桜子は離れた。その際に邪悪な笑美を浮かべて。

「はーい」

再び駅へと向かう。

「あ。その前にちょっと待つてくれる? 本屋さんで買い物
桜子は離れた。その際に邪悪な笑美を浮かべて。

月曜日。

雅彦は元気に家を飛び出した。

野球の試合でのレギュラー落ちのショック。

それは日曜にあつた痴女達の痴態で吹っ飛んだ。
結果としてリセットには成功した。

そして…そのリセットした当人は。

「見てご覧。酒井君。とてもいい表情しているよ。君、こんな可愛い表情も出来るんだね」

「…………勘弁してください」

休憩中にポータブルのビデオ再生機器で日曜のことを見せる山崎。
酒井は「己が痴態」を見ないよつに田を逸らしているが既に当口の痴態を思い出して赤面している。

(どうしてオレは酔っ払つと…)

「はーいはーい。酒井君のためにいい物を持ってきたわよ」

それは年齢一ヶタ台の男子子役の写真集だった。

「いやあ。それにしても酒井君がショタとは思わなかつたわ。今度はどこかの小学校にでも行く?」

からかっているが効果は観面。酒井は耳たぶまで赤くしている。

「だあああああ。もう一度と酒なんて飲むものかああああ
決意表明するものの
(それって……一日酔いした奴が一度は言つヤツなんだよなあ)
「一日酔い」が身に覚えの同僚達はその宣言が空手形と言つのは
くわかつていて。

四杯目 吞まれたら小僧な恋？（後書き）

あとがき

間が空きましたが4話目をお送りします。

三話目で出てきた年齢退行の設定を生かした話と思い、当初は英
国の取引先が日本滞在中のメイドを探しているとなり、そこでスコ
ッチウイスキーをたっぷり飲まれイギリス風メイドになり切った
真澄が、翌日幼女になつて…と言ひ展開でした。

しかしどもまともはず。メイドは諦めて年齢退行だけに絞り今
回のようになります。

「富乃宝山」のぐだりは2011年9月25日に行われた「@ma
nbow」のイベント。

『Happy smile 17』内で披露されたVTRで実際に
声優の井上喜久子さんがやつてしまつたことから。

見ていて本当に「うわあ……」と思いました（笑）

ゲストキャラクターの雅彦君。

まだ性に田覚めてない少年では「うはうは」とは行かなかつたよ
うで（笑）

まして相手が「実は男」と知つたら愕然とするか、別なものが田
覚めそうです（笑）

三話目では出来はなかつたウルトラパロ。

今回は隊長さんから。

やはり名セリフは「なにつ！？」と思ひ（笑）

それから元・パン屋の運転手さん。

次は…会間を空けずお送りしたいと思いますが（前回もそんなこと）

お読みいただきましてありがとうございます。

城
弾

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6418n/>

とらぶる すぴりっつ

2011年11月29日16時50分発行